ジャン・パウル『レヴァーナもしくは教育論』入門

池田浩士

第一回講義　ガイダンスもしくはオリエンテーション

諸君！　これから一年間、我輩が諸君とともにジャン・パウル・フリードリヒ・リヒター氏の『レヴァーナもしくは教育論』を勉強することになったわけですが、きょうはまず、これからの授業方針というか、ガイダンスもしくはオリエンテーション、所信表明ないしは冒頭陳述、そういったふうなことをお話ししておきたいと思う。

ご承知のように、昨年度このクラスの授業をうけもっておられた理非多（リヒク）先生は、いろいろ教育者としてふさわしくない言動があったとして、この三月限りで懲戒免職処分に処せられました。後任者の我輩は、理非多・元教授の轍を踏まぬよう、つまり、「学問研究とは何か？」とか「教育とは何か？」とかいう過激的かつ無意味な問いを発したり、その解答を実践によって模索したりせぬよう、重々自戒しつつ、ブルジョワ民主主義兼民主ファシズムの精神にそって、諸君とともに誠心誠意、「教育論」の研究にはげむ所存であります。でありますからし

て、諸君もどうか、ストライキ、大衆団交、封鎖・占拠、学園および地域闘争、等々の無法な行動をくれぐれもつつしみ、まちがっても現実にたいする不満や疑問をいだくことなく、充実した平和な学園生活を送られるよう、希望しておきたい。もちろんそのためには、この我輩の講義に毎回欠かさず出席して――もちろん出席は毎回とりますから――現代の世相風俗をことごとく網羅しつつ稀代の流行作家ジャン・パウル氏のイメージを根底から刷新するこの講義、新構想大学の先取りなりと官辺筋から絶讃されておるこの講義を傾聴することが第一である。

さて、この話しからもすでにおわかりいただけたことと思うが、これから一年間の我輩の講義は、個別専門馬鹿的にもっぱら『レヴァーナ』を対象とし素材としながら進められるので、諸君もぜひとも、なるべく早い機会にテキストを購入して、作品そのものに即しながら、予習復習おこたりなく、我輩の授業の意図するところを深く理解されるよう、かさねて希望し、これをもって自己紹介とガイダンスにかえさせていただく次第であります。

なお、次回は、諸君のこれまでの勉強がどれほど効果をあげているかを見るために、簡単な試験をおこなうので、そのつもりで。

第二回講義　試験

問題　左のテキストに誤りがあれば正せ。（所要時間・九〇分）

Ihrer

Königlichen Majestät

der Königin

Carolinie

von Baiern

in tiefster Ehrfurcht gewidmet

von dem

Verfasser.

六六

第三回講義　『レヴァーナ』の成立と構成

前回の試験の答案を調べてみたが、出来が大変よろしくない。あの問題は、なにをかくそう、一八一四年に刊行された『レヴァーナ』第二版（改訂増補版）[1]に付されている献辞を、印刷代を惜しまずそっくりそのまま複写したものであります。ヒゲ文字が読めなかった、などというのは論外として、どうも諸君の答案を見ていると、活字で印刷されたものはすべて正しい、誤りなどあろうはずがない、と信じこんでいるのではないかと思われるフシがある。ところがげんに、立派に国費で印刷された我輩のこの講義録にしてからが、さてこのさきどんな途轍もない嘘と誤りがどれほど多くとびだしてくるか、諸君ともども我輩までが手に汗にぎって見ているわけであるし、ジャン・パウル氏自身も、作品のなかに誤りの種をまく点にかけては、これまた超一流の名人だったのである。『レヴァーナ』は、初版が一八〇七年に出て、これは二巻から成っていたわけですが、その後一八一四年に、分量にしてほぼ五分の一だけ大きくなった改訂増補版が、三分冊で刊行されました。我輩の古書探知器は最近市販の盗聴器ほど性能がよろしくないため、出版後すでに百六十五年以上にもなるというのにまだ一八〇七年の初版を入手するに至っておらぬ始末で、この版についての詳細を諸君にお話しすることができないのは残念であるが、第二版について言えば、これはさきに申し述べたとおり、三分冊になっておって、各分冊が「小冊」(Bändchen) と名づけられているのであります。そして、三巻の小冊全体が通し番号で計九つの「破片」(Bruchstück) に分けられ、各破片がそれぞれ一つないし九つの「章」(Kapitel) にわかれている。それらの章

はさらに「節」(前にならって§と横書きすべきところ、諸般の事情により§と縦書きにいたします)に分割され、節は全巻通し番号で第一五八節まであるわけです。ところが不思議なことに、§9と§24は、どこを探しても見当らない。つまり、ないのである。ジャン・パウル氏研究専門家のエードゥアルト・ベーレント氏によれば、[2] 初版ではそのうえさらに、同一の§140が三つも存在するというミスを著者はおかしておったのだそうです。が、これは遺憾ながら改訂版では訂正されてしまった。惜しいことをしたわけですが、結局、§9と§24の両者だけは、初版以来ほとんどの版で無断欠勤をつづけ、現在にいたるもなお行方不明の状態にあります。同じように、問題の献辞も、単なる誤植(ミスプリント)ではなく、ジャン・パウル氏自身が原稿の段階で、Caroline と書くべきところを Carolinie と書いてしまった。そしてそれがそのまま同氏の生前はもちろん死後にまで引きつがれ、ついに一八六四年の第四版ではじめて訂正されるまで、この間に出た五種類の全集(全著作集)におさめられたものもふくめて、すべての版がこの誤りを半世紀にわたって忠実に踏襲し、われわれ好事家の目を楽しませてくれたのであります。

さて、そういうわけで、初版になかった献辞をつけ加えてバイエルン女王カロリーネ陛下のご機嫌取りをしておかげで、わが第二版は、ジャン・パウル氏風に言えばまさに「改訂増誤版」(zweite, verbesserte und mit neuen Druckfehlern vermehrte Auflage)となる機会にめぐまれたのでありますが、同時にまた、そのおかげで、女王陛下は大いに満悦し、バイエルン国の国庫がジャン・パウル氏の年金支給を引きうけよう、ということになったのでした。ところで、そもそも何故に同氏が同書を同女王陛下に捧げようなどという気になったのかについては、例によって各種週刊誌あたりの独創的な勘繰りをふくめた種々様々な臆測が飛びかっておるわけですが、権威者たちの見解を総合すれば、まず第一に、同女王陛下が五人の子供の母だったからだというのであり

ます。それではどうして、たとえば一ダースからの餓鬼をかかえた貧民街のおかみさんあたりが『美学入門』や『フィクスライン』や『生意気ざかり』や『巨人』や、とりわけ『貧民弁護士ジーベンケース』あたりの献辞となって名を残すことにならなかったのか――という疑問は、こんな説明によっては何ひとつ解決されないわけですが、こういう疑問に深入りすると、「文学とはそもそも何なのか？」とか「教育とは何か？」とかいう例の躓きの石をゴロゴロと敷きつめた悪路に迷いこんでしまうことになりかねませんから、敢えて問題の核心を避けて、「この女王は一八〇一年に結婚したジャン・パウル氏の妻、つまり彼の三人の子供の母親と同じ名前だったからである」というのを、我輩の画期的な新学説として披露することで、この問題に最終的な決着をつけておきたいと思う次第であります。(8)

いずれにせよ、我輩が知るかぎりでは、ジャン・パウル氏は、三十歳のときに世に出た『見えないロッジ』以来の〈教育〉への関心を、自分自身の三人の子供の誕生と成長にふれて一度に開花させ、《よその本の著者を手がかりにしてよりはむしろ自分自身の子供たちを手がかりにして、これをさらにいっそう成熟させる》ことになったのであります。《生命は生命に生気を与える。子供たちは、あらゆる教育者よりももっとうまく教育者を教育する。》――どことなくわがマルクス氏をホーフツさせるこの確認を、ジャン・パウル氏は第二版の「緒言」のなかでおこなっております。まこと、《そもそも初代レヴァーナよりもずっと以前から、子供たち（言いかえればすなわち経験）が彼の教師であって、書物はときおりの補講教師にすぎなかった》のであります。『生意気ざかり』の第四巻が一八〇五年五月に出たとき、ジャン・パウル氏は、一八〇二年生まれの長女エマ、ひとつ年下の長男マックス・エマヌエル、さらにひとつ年下の次女オディーリエという三人の子供の父でした。諸君がこれから実際

に『レヴァーナ』を読んでみれば、この教育論がどれほどこの子たちの教育と密接に関連しているか――つまり、この子たちにたいする教育だけでなく、むしろこの子たちから受けた教育でもあるわけだが――そのことがよくわかるはずであります。今世紀前半の代表的なジャン・パウル氏研究家のひとり、ヴァルター・ハーリヒ氏（このひとは、あるいは、同じくジャン・パウル氏に深い関心を寄せているＤＤＲ（ひがしドイツ）の哲学者、あの一九五六年のハンガリー蜂起に関連して六四年まで逮捕拘留されていた、われらのヴォルフガング・ハーリヒ氏[4]のお父さんかもしれませんね）は、こう言っております、「本書（つまり『レヴァーナ』）のもっとも重要な点はこれである、つまり、この教育論がほとんど子供の立場から、あるいはいずれにせよ子供を詳細に知りつくしながら、書かれているようにみえるという点である。[5]」　また、ジャン・パウル氏の作品のアンソロジーを編んだヴォルフガング・ハルトヴィヒ氏は、こうも言っております、「家庭用図書のつもりで一八〇七年に刊行された『レヴァーナ』のなかで、彼（つまりジャン・パウル）は秩序立った教育体系を論じるつもりなどなかった。むしろ、子供の心理を詳細に知りつくしながら、ある一定の教育状況にふさわしい有効な助言を与えようとしたのである。[6]」――その「有効な助言」そのものについては、おいおい勉強していくわけでありますし、またジャン・パウル氏をして敢えて教育に関するこのような助言をなさしめた時代的背景については、来週までに諸君に研究してもらって、それを四百字詰原稿用紙五枚以内にまとめて提出してもらおうと思うのだが、いずれにせよ、ジャン・パウル氏は、自分の子供たちによって刺激され発展させられながら、《教育について書くということは、一度にほとんどすべてのことについて書くに等しい》（第二版「緒言」）ことを承知のうえで、これを書いたのであります。そして、この本は、人気作家ジャン・パウル氏の多くのベスト・セラーズのなかでも特に絶大な人気を博し、初版、増誤

版とも飛ぶような売行きで、苦手なゲーテ先生からもオホメをあずかり、あげくのはてにはカール・ラインホルトという人が作った『レヴァーナ辞典』なるワルノリ図書までが、おかげで版を重ねたほどでした。(?)

ところで、脱線をかさねているうちにカンジンなことを忘れておりましたが、題名の『レヴァーナ』についてちょっと説明しておく必要があろうかと思う。古代ローマには、生まれたばかりの赤ン坊を父親の足元に置いて、父がその子をとりあげる（levare）ことによって自分の子であることを認知するという風習があったのだそうです。その立会人として招かれる女神が Levana なのであります。それでは最後に、つぎのようなジャン・パウル氏の文章の一節を結びの文句として、きょうの講義を終えることにいたしたい。

――《少なくとも、枯れやすいエデンの園のなかの軽やかな花の小神たるこの小さな生きものたちにたいするこのうえなく深い愛情によって、本書は書かれている。かつて父たちに父の心を与え給うよう乞い求められた母なる女神レヴァーナが、本書の題名が彼女にさしだす願いをききとどけ、それによって題名をも本書をも正当化したまわんことを。》（初版「緒言」）

レポート　『レヴァーナ』の時代的背景について

雑学部二年Q組　森　例外

十九世紀初頭のヨーロッパは、まさに世紀の変わり目にふさわしい激動のなかにあった。とりわけドイツは、

フランス革命の屍をふみこえてヨーロッパを席巻するナポレオンの軍勢によって、その根底から揺り動かされていた。一八〇三年、ナポレオンの意を体してレーゲンスブルクで開かれた帝国代表委員会は、ドイツの群小邦国の数を削減することを決定する。一八〇五年、アウステルリッツの会戦。一八〇六年、神聖ローマ帝国の消滅。そして、ナポレオンのベルリン入城。『レヴァーナ』初版が刊行された一八〇七年には、ティルジット講和によってプロイセンはその領土の半ばを失うことになる。

ジャン・パウル自身、この世紀的大変動を明確に意識していた。すでに一八〇一年、新しい世紀の始まりにさいして彼は、『新年の夜の不思議なパーティ』という小品を書き、新世紀とともに忽然と出現する不可解な現象との夢の中での格闘を描いていた。この彼の激動の意識、危機意識こそ、さらに次の世紀にまで彼の作品が生きつづけ、あるいはむしろ新たな危機のなかで再生をくりかえすことになる理由なのだ。『新年の夜の不思議なパーティ』は、刊行当時ほとんど黙殺に近い迎えかたをされながら、まる一世紀が完全にすぎさったのち、二十世紀のドイツ革命のなかで、左翼表現主義者アルフレート・クービーンによって挿絵入りで再刊された。(Jean Paul: *Die wunderbare Gesellschaft in der Neujahrsnacht.* Mit 27 Federzeichnungen von Alfred Kubin. R. Piper & Co. Verlag, München 1921.) フランス革命後のドイツ市民社会のアクチュアルな諸問題——言論の自由のための闘い、君主制=政治的エゴイズムにたいする批判、自由な人格の主張、教育問題、等々——に、皮肉とユーモアと独創的なイメージを駆使して取りくんだジャン・パウルの作業は、現代の戸口における革命と新しい芸術運動のなかで正当にも再評価され、現在の激動期のなかでの第三の最盛期に先立つ第二の最盛期を体験したのである。

ジャン・パウル文学の第一の最盛期は、言うまでもなく、作者自身が生きたあの危機の時代そのもののなかにあった。当時の人気作家ジャン・パウルの人気は、決して単純なものではなかった。一方でバイエルン女王に『レヴァーナ』を捧げた彼は、他方では、公然たる反封建主義者として、多くの作品のなかで封建貴族を嘲笑し、平民の側に与している。そうかと思えばまた、たとえば、ゴータ公エーミールと協力して検閲にたいする闘いを展開してみせる（『自由の書』、一八〇五年）。『生意気ざかり』を未完のままのこしたジャン・パウルは、一八〇五年以後、死にいたるまで、もはや、グロテスクな諷刺を基調とするフィクション（『従軍牧師シュメルツレのフレッツへの旅』一八〇九年、『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』同年、『フィーベルの生涯』一八一二年、『彗星』一八二〇年＝未完）と、『自由の書』にはじまる一連の政治的文章（『ドイツにあてた平和の説教』一八〇八年、『フィヒテ〈ドイツ国民に告ぐ〉批評』同年、『ドイツのあけぼの』一八〇九年、『軍神（マルス）と日神（フェーブス）の王座交換』一八一四年、『政治的な四旬節説教』一八一七年）しか書かなかった。この後期のジャン・パウルをそれ以前の人気作家ジャン・パウルから切りはなして論じることは、あらゆる〈文学〉を〈政治〉から隔離して考えようとするあの周知の傾向の発現でしかない。後期の代表作『レヴァーナ』こそは、彼の小説に一貫して流れる〈教育〉的志向、文学的には〈教養小説〉への志向として表現されるこの基本的志向を媒介としながら彼の〈文学〉と〈政治〉の不可分性を証明するものにほかならないのである。

『レヴァーナ』初版が刊行された一八〇七年は、ヘーゲルの不滅の書『精神現象学』が現われた年でもあった。近代ブルジョワ社会の自己意識たるこのふたつの書が、いずれも個人の形成を、個人の自由でしかも意識的な発展を、追求しようとする精神によって導かれていることは、決して偶然ではない。ある意味においてこの両者は、

ブルジョワ社会がその崩壊にいたるまでついにゆるすことはないであろうものへの模索の試みを、その社会の黎明期に、いちはやく開始し、その実現を理念のうえで達成しおおせたかにみえる。これらふたつに共通して息づいている展開と形成の精神こそは、激動期のなかに過渡期を見ぬく視線のあかしであり、それゆえにこそ、ひとつの激動期そのものを超克して未来にまでそびえつづけることができたのである。　以上

第四回講義　教育無用論と教育必要論

さてきょうからいよいよ、『レヴァーナ』そのものの内容に立ちいった勉強をしていきたいと思う。諸君には、さきにこの本の時代的背景についてのレポートを提出してもらって、そのうち中の下くらいの出来のものをひとつ、すでにプリントして配布しておいたわけであるが、ジャン・パウル氏自身、「教育論」を書く必然性を、なによりもまず時代的背景のなかに見出しておったのであります。「教育の重要性」について論じた第一破片第一章のなかで、彼はこう述べております。《これからの未来は、憂慮すべきことに――地球は戦争の火薬でいっぱいだ――民族大移動の時代と似ており、われわれの時代は精神大移動と諸国家大移動の準備をしていて、あらゆる国家機構や教卓や寺院の下で大地が揺れている。》（§2）　こうした激動期にこそ、未来そのものである子供の教育について真剣に考えねばならない、というわけです。ところが、このような激動期であればこそまた、はたして教育などというものがそもそも可能なのか、という疑問も当然のことながらおこってくるだろう。そこで

著者は、「教育など役に立たない」という意見と「教育は重要である」という意見とを対決させることによって、この疑問に答える方途をさぐろうとするのであります。

この対決は、ヨハネウス・パウリーヌス Johanneus-Paulinus という学校における就任講演と退任講演というかたちをとっておこなわれます。言うまでもなくヨハン・パウル（Johann Paul）つまりジャン・パウル氏自身の名前をもじったこの学校に就任する新任教師は、就任講演のなかで、もっぱら教育無用論を主張するのであります――《学校教育も家庭教育も、悪い結果をもたらしはせぬが、またそれ以外の結果ももたらさないであろう、という証明をたずさえてこの名誉ある地位に就くとき、わたくしは、末席教師としてわが教育の場に雇用されたことにたいするわたくしの喜びを、せいいっぱい表現したいと望んでいるのであります。》（§4）なぜ教育は効果をあげないのか――就任講演者が考える理由は、ほぼつぎのように要約できようかと思う。つまり、第一に、生きた人間にたいして死んだ手本を示してみても何にもならないということ。《死んでしまっている言葉が、生きて現にそこにいる行為にたいして何をなしえよう！　現在は新しい行為のためにはまた新しい言葉も持っております。教育者は自分の手本の輝かしい屍体のための死んだ言葉しか持っていなかったのです。》（§6）そして第二に、なんといっても最も強大で決定的な教育力を有しているのは、ひとつには「民族精神」（Volk-Geist）であり、もうひとつには「時代精神」（Zeit-Geist）である。これらこそは、教員（Schulmeister）であると同時に教員養成所（Schulmeisterseminar）でもある。そして、これらがその強力な教育をおこなうさいに用いる力は、「反復」と「生きた行為」であって、これにかかっては人間の力による教育など、とても太刀打ちできるものではない。――ざっとこのように述べて、就任講演者は教育の無力さを強調するわけであります。

ところが、我輩の見るところでは、この就任講演の重要性は、こうした表面的な論旨自体にあるのではないのである。教育の効果のなさを語る彼は、それにつづいてすぐあとに、こう付け加えています――《この効果のなさに関する安らかな確信をわれわれ全員にお伝えできる幸運をわたくしが有しているとすれば、あるいはわたくしは、われわれ全員がわれわれの困難な職務を気軽に陽気にひきうけ――慢心することなく――なにひとつ恐れる必要のない確たる信念をもつようになるうえで、貢献をおこなっていることになるのかもしれません。われわれは毎日、生徒たちのうしろにくっついて出入りし、気苦労の椅子たる教壇の椅子にすわっておりさえすれば、それでもう何もかもちゃんとうまくはこぶのです。》（§4）　さらにはまた、こういう発言もおこなっている（引用ばかり続きますが、訳読の演習もかねて、敢えて引用を続けましょう）――《どんな生命も、それ自身によってしか繁殖伝播させられない。たとえば行為は行為をつうじてしか、言葉は言葉をつうじてしか、教育は教育をつうじてしか。でありますから、卓越せる同僚諸君、われわれの教育もまた、生徒たちを教育者へとおちぶれさせていくことをつうじて、そしてその彼らが後にはさらにまた別のものたちに語りかけていくということをつうじて、そして、わがヨハネウス・パウリーヌス学園も、われわれがわが校から家庭教師、学校教師、教理教師を養成して送り出し、ひいてはその彼らが彼らの同類たちを、つまりあのクセノポーンの教育物語の主人公キュロスたちではなく、キュロス教育の書とキュロス教育係とを、良き学舎のなかで生みだすことをつうじて、多数の教育の場のための教育の場となるであろうことを希望し、この希望によってみずからを勇気づけ確信づけようではありませんか。》（§13）

つまり、教育にはちゃんとそれなりの効果が、ネガティヴな効果があるというわけである。言いかえれば、教

育のもついわば反面教師的役割を、この教育否定論者はちゃんとつかんでおるのであります。ジャン・パウル氏の思考は、Aと反Aとがあってその対立から高次のBが生まれる――というような機械的弁証法とはまったく無縁なのであって、Aそのものがつねに反Aをふくみ、反AはAをふくみ、こうしてAと反A、反AとAが（しかもこのふたつのAとA、反Aと反Aは決して同一のものになるとは限らないわけですが）激しく干渉しあいながら運動を展開していくのであります。

だがしかし、諸君、このようなヴィヴィッドな展開は、A対反Aという硬直した構造に固執するばあいとは比較にならないほど危険であること、これは言うまでもありますまい。この危険のなかには、もちろん、展開主体の側の転向の危険もふくまれている。これを忘れてはならない。しかしなによりもまず、その危険は、意識的な反面教師がもつ爆発的な危険性である、と言うことができるでありましょう。たしかに、無意識的な反面教師は、あのいまわしい学園紛争のタネになります。がしかしそれはまた、めでたく学園紛争を収拾する力にも転化します。けれども、意識的な反面教師ときた日には、紛争を収拾する役に立たないばかりか、それを永続化させ全体化させるという致命的な役割を果すのであります。余談はさておき、教育のネガティヴな効果を強調する就任演説者に耳をかたむけましょう。《教育によって作用をおよぼすことなどわれわれにはほとんど、もしくはまったくできないのだ、という命題が真であるということになるやいなや、卓越せる同僚諸君、われわれはそもそも人類にたいして貢献しているのだという希望に、心をなぐさめることを許されるのであります。ちょうど機械的な世界において、摩擦の抵抗がなくなるやいなやどんな運動もとめどもなく継続してしまって、あらゆる変化は永遠につづくものとなってしまうだろうように、精神的世界においてもまた、もしも生徒があまり勇敢に教育者に

抵抗しなくなったり、教育者をやっつけなくなったりするやいなや、われわれがまだまったく知らないような味気ない生活が、永遠に反芻されることになってしまうでしょう。》（§11）――しかしながら、教育のネガティヴな効果についての認識も、ここに至ってはもはやとうてい当局の容認しえぬところとならざるをえないでありましょう。当然のことながら、この新任者は免職されるのであります。

かくして、彼の再登場となります。というのはつまり――《筆者がその就任講演をおこない、またそれに先立ってそれを起草するやいなや、そのなかに退任講演の要素が多く発見されて、その数日後に筆者を免職解任してしまうことによってさらにもっと自分のことをしゃべるためのすばらしい機会を実際に与えてやろう、ということになったのでした。こうして筆者は、その筋から告げられた別れを同僚教師諸君にも告げ、そのさい、彼が二度目にしかも最後にすわった教壇の椅子の重要性を、彼の短い退任講演のテキストにするという仕儀にあいなったのであります。》（§15）　なんと、あの教育無用論者が、今度は確たる教育有用論者、教育重要論者となって、退任講演のための講壇に立っているわけである。そしてシャアシャアと、《良き教育はどれほど強く時代の心をとらえるか、というテーマ以上に教育の重要性と関連したテーマを、別れの挨拶として見出すことはできません。いわんやこの演壇に立たれたわたくしの先任者、つまり就任講演者でありますが、あのかたが一昨日話されたことのいくつかに今日あらためて第二回目の光を当てておくきっかけを――なにしろ解任されてしまったあととなっては、ここでそれ以上のふるまいをすることなどわたくしには思いもよりませんので――そこから得たとあっては、なおのことであります》などと語る始末。この転向ぶりを見よ！　などと白い眼をむいてはいけない。Aが反Aを内包するという例の弁証法がここにも貫徹されていることを、この言葉自体から読みとろうではないか。

ところで、これより二日前、就任講演の教育無用論者は、《いったいどうして、まだどの時代もわれわれの時代ほどたくさん教育について語り、助言し、実行したためしがない、などということがおこったのでしょうか？そしてまたどうして、諸国のうちでこのドイツほど、ルソーの綿毛のはえた種子がフランスから飛んできて播かれたこのドイツほど、それが多くなされているところは他にない、などということがおこったのでしょうか？》（§5）という疑問、ジャン・パウル氏自身がふたつの版の「緒言」と第一破片第一章「教育の重要性」のなかでくりかえしつぶやいたあの疑問を、彼なりに何度も述べていたものでした。この疑問が、いわゆる〈文明開化〉期の日本でも若干の固有名詞を変更しただけでそっくりそのまま口にされていたであろうことは、きょうここに教材として持ってきた当時の新聞広告のひとつを見ても推察でき①るわけですが――諸君、どうか教材①をよく見てくれたま材え――退任講演者たる教育重要論者は、この疑問をそのま教まひきつぎつつ、一挙にそれを客観的疑問から主体的疑問へと、言いかえれば事実認識的疑問から現実批判的疑問へと転倒させてしまうのであります。すなわち、《時代が教育についてこれほど多くを書くということは、すぐそのまま、教育の喪失と、教育は重要だという感覚とを、前提としている。失われた品物でなければ、町中で大声で呼びたてられたりはしない。つまり、ドイツ国家自身はもはや充分な教育をおこなっておらず、その結果、教

●何學でも教へる私塾

○方今人才教育文化進歩ノ爲メ區々中小學校ノ盛ナル衆人ノ歎美ハ勿論余ヤ甚賞賛怯ナリト雖ドモ世ト共ニ文筆ヲ嗜ミ居候得バ萬分ノ一ヲモ教化補助致シ度志願ニテ申ノ三月官許ヲ以テ變則私塾開業仕候處追々生徒多數ニ相成今般小學教則同樣ニ改正致シ候處頃日和漢ノ群籍ニ於テハ博覽多識ノ文士來寓シ傍ラ西洋翻譯書支那新聞詩文章ノ教授ハ申ニ及バズ傭書寫字ニ至ル迄苟モ人事ニ補益アル者ハ彼是ノ嫌疑ナク各々望ミニ任カセ敏速ニ教勵致シ候間專學ノ輩ハ勿論且銘々業課ノ餘暇長幼共晝夜ノ差別ナク專ラ來學ヲ裕待スト云爾

第一大區小十二區馬喰町元郡代邸　野口霞村

（明治六年十月發行「新聞雑誌」第百四十九號所載）

師が子供部屋や教壇や机でそれをしなければならないということになる。》（§17）

これは、就任講演者と退任講演者との意見の対立のなかからジャン・パウル氏自身が得た確認ですが、もはやこれは、疑問への無色透明の客観的解答ではない。ひとつの欠如の認識であります。ところがそうした欠如の認識は、その欠如と対抗するための実践（欠如につぎをあてて欠如を生きのびさせるためのではなく、欠如を顕在化させるための実践）へとそれが移される瞬間に、すでにひとつの告発となるのです。すなわち、あらゆる欠如詞（Privatives）は、個別専門科学としての言語学から見れば空間的・物理的な欠如を即物的に表示する語にすぎないのですが、ジャン・パウル氏の文学表現は、この言語学上の欠如詞[8]に決定的に欠如している価値観と倫理、つまり主観を与えるのであります。そして、主観を与えられた欠如の認識は、ジャン・パウル氏によってもっぱら個人の教育の重視となって、私教育の理念と実行への模索となって、実践にうつされます。彼は、公教育の不備を補正ないし補修してやるかわりに、その貧困化を尻目にかけて、そうした貧困な公的状況そのものを尻目にかける個人の形成にとりくんでいくのであります。

第五回講義　教育の精神と原理

十九世紀初頭のドイツ封建主義は、教材②として諸君の手もとに配った「教育勅語」の時代の日本の状態にまでまだ至っていない要素と、すでにそういう状態を越えている要素とを、あわせそなえておった。というのはつ

まり、一方ではまだ近代的資本主義の発展を見ておらず、いわんや帝国主義段階とはほど遠かったけれども、他方ではすでにフランス革命の余波の洗礼を思想的にさまざまなかたちで受けていたのであります。したがって、いずれにせよわがなつかしき「教育に関する勅語」的な絶対主義的帝国主義の前近代的近代主義に支えられた公教育原理は存在しえなかったのである。もちろん、だからといって、自由の民の自由な国というファウスト的理念を土台とする人間的公教育の原理が生きていたわけでも、さらさらなかった。むしろ、若きマルクス氏が指摘したように、フランス革命敗北後のヨーロッパ世界の本質がアンシャン・レジームの名残りであり内面化（Erinnerung）であったとすれば、そしてドイツはこの旧政体の二度目の喜劇を演じていたのだとすれば、まさに、「教育勅語」的状況はこの社会の潜在的な、より正確には、präexistierend な、つまり生前存在的・前世存在的な真の本質だったのであります。こうしたなかにあって、

② 教材

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

教材②のための補助教材

DAS KAISERLICHE RESKRIPT ÜBER ERZIEHUNG

Wir geben euch hiermit zu wissen :
Unsere Kaiserlichen Vorfahren haben das Reich auf breiter und ständiger Basis errichtet und die Tugend tief und fest eingepflanzt. Unsere Untertanen sind in unverbrüchlicher Treue gegen den Herrscher und in kindlicher Liebe zu den Eltern stets eines Sinnes gewesen und haben von Geschlecht zu Geschlecht diese schöne Gesinnung in ihrem Tun bekundet. Dies ist die edle Blüte unseres Staatsgebildes und zugleich auch der Urquell, aus dem unsere Erziehung entspringt. Ihr Untertanen ! Liebet und ehret denn eure Eltern, seid ergeben euren Geschwistern, seid einig als Gatte und Gattin, und treu als Freund dem Freunde ! Haltet auf bescheidene Mässigung für euch selbst, euer Wohlwollen erstrecke sich auf Alle ! Pfleget des Wissens und übet die Künste, auf daß ihr eure Kenntnisse und Fertigkeiten entwickelt und eure sittlichen Kräfte vervollkommnet ! Bestrebet euch ferner das öffentliche Wohl und das Allgemeininteresse zu fördern ! Achtet die Reichsverfassung und befolget die Gesetze des Landes ! Sollte es je sich nötig erweisen, so opfert euch tapfer für das Vaterland auf ! Erhaltet und mehret also das Gedeihen Unserer wie Himmel und Erde ewig dauernde Dynastie ! Dann werdet ihr nicht nur Unsere guten und getreuen Untertanen sein, sondern dadurch auch die von den Vorfahren überkommenen Eigenschaften glänzend dartun.

Dieser Weg ist wahrlich ein Vermächtnis, das Uns Unsere Kaiserlichen Vorfahren hinterlassen haben, und das die Kaiserlichen Nachkommen sowie die Untertanen allesamt bewahren sollen : untrüglich für alle Zeiten und gültig an allen Orten. Es ist daher Unser Wunsch, daß Uns sowohl wie euch, Unsern Untertanen, dies stets in aller Ehrfurcht am Herzen liege, und daß wir alle zu derselben Tugend gelangen mögen.

Gegeben am 30. Tage des 10. Mondes des 23. Jahres Meizi.
(Kaiserliche Namensunterschrift. Kaiserliches Siegel.)

(文 部 省 謹 訳)

ジャン・パウル氏は、さきに説明しておいたように、公教育の理念と実践の欠如をきわめて批判的に確認しながらも、だがしかし、みずからの教育論をこの方向の模索には向けず、徹頭徹尾、個別具体的な私教育の原理に固執するのです。（ついでに言っておくなら、『レヴァーナ』のなかで簡単に述べられている「君主教育」すらもが、個人ないし私人としての人格形成を主眼としておる。『巨人』のアルバーノの教育、等々も同じ。）　この点は、たとえばフィヒテ氏の『ドイツ国民に告ぐ』の基本的志向、生前存在的公教育状況をみずから現世存在的状況へと一歩すすめることを熱望したあの志向などとは、まっこうから対立するものであり、また、我輩の私見を述べさせていただいてもさしつかえないなら、表面的印象とは逆に、この時点でヨーハン・ゴットリープ・フィヒテ氏に比べてジャン・パウル・リヒター氏が決定的にすぐれていたことの証左なのであります。

『レヴァーナ』そのものに即して説明することにいたしたい。

第二破片第一章では「教育の精神と原理」が語られております。ジャン・パウル氏は、まず、《目標は道よりも前に知っておかれねばならない。教育の手段と技術はすべて、まず、教育の理想ないしは原像によって規定される》（§22）ということから出発いたします。ところが両親たちは、我輩などもそうですが、ふつう、原像にではなく自分たち自身の勝手な願望にあてはめて子供をつくりあげようとする。子供は、両親が静かにしてほしいと思うときには身動きせず、音をたててほしいと思うときには鳴り響くような、小ぎれいな立ちんぼ機械（Steh-Maschine）や魂眼覚時計（Seelen-Wecker）になることを求められるのです。当然のことながら、こんなものをつくりだすことは教育の目的ではない。これでは、親がすすんで子供の発展を阻害しているようなものである、というわけです。けれどもジャン・パウル氏は、このあたりまえの確認から、さらに先へと進みます。教育とは、

ただ単なる発展でもなければ、あらゆる力の発展でもない。それでは、そもそも教育の目的ないしは教育の精神とは奈辺に存するのか？――それは、ひとりひとりの人間のなかにつつみかくされている（つまりどこか外部にあるのではない）理想人間（Ideal-Mensch）あるいは懸賞付人間（Preis-Mensch）を解放することにほかならないのである。《だが、理想人間は、ひとりの Anthropolith（石化人間）として地上にやってくる。そこで、彼の手足の何本かから石の外皮をはがしてやって、ほかの手足が自分で自分を自由にすることができるところまでもっていってやること、これが教育であり、あるいはこれが教育でなければならない。》（§26）　こうしてみると、ジャン・パウル氏が《教えることはすべて、種を播くことであるよりはむしろ、あたためてやることだ》（§17）と言って、あたたかみ（Wärme）の重要性を随所で強調していることの意味も、具体的に明らかになってくるでありましょう。（ついでに視聴覚教育用の教材③も見ておいてください。）

ところで、人間にとって、彼の理想人間がもっとも明瞭にあらわれてくるのは、ほかでもない、青春時代である。こうジャン・パウル氏は考えます。したがって、教育はこの時期に焦点をあわせる必要がある。つまり、この時期になって自分自身で理想人間と向きあうことができるようにしてやるために、幼児や少年少女の教育がなされなければならないのであります。ジャン・パウル氏の小説作品が、どれもこれもほとんど例外なしに幼年時代から青春時代までの主人公の歩みを主題ないしは副主題としているのも、こうした考えに支えられてのことでありましょう。同氏が、くりかえし未完に終らざるをえないにもかかわらず執拗に〈教養小説〉形式を試みつづけるのも、この思想ゆえなのでありましょう。この点について、マックス・コメレル氏がおこなっているきわめて鋭い、だが半分だけ正鵠を得た指摘を紹介しておきたいと思う。コメレル氏は、その有名でかつ興味ぶかい

教　材　③　教育の精神と原理

『ジャン・パウル論』のなかで、つぎのように書いております。「たしかに、ひとつの長篇小説のなかで主人公の子供時代と青年時代とを前からにせよ後からにせよとりあげるのは、新しいことではない――それよりはむしろ、ゲーテが親和力のなかでしたように、人生経路の総体性を放棄し、複数の人生のある種の交錯を危険地帯としてとりだしながら、相反するいくつもの力の総体性によって人生経過の総体性のかわりをさせていることのほうが、新しい。少年や若者にはじめての友人選択や愛の選択をさせたり、課題を果しうるまでに彼を成長させたり、彼に旅や結婚をさせたりすることもまた、新しいことではない。しかし、成長の区切りとしてのそういったモメントにその神聖さを奪回させ、それらのモメントのなかで生成がほっとひと息つくのをわれわれに聞きとらせるのは、新しいことである。[9]」　ついでにいっておくならば、この指摘を手がかりにして、われわれは、何故にまた同じ時代に一方ではゲーテ先生の作品が形式的に完成しえて、ジャン・パウル氏のものがあまりにもしばしば完結しえなかったのか、という問題の解明にすすむこともまた、可能でありましょう。

さて、ところで、青年時代にもっとも明らかな姿をあらわす「理想人間」とは、そもそも何なのか？　さきほども括弧にくくってちょっとふれておいたように、ジャン・パウル氏は決して何か外在的な規範や理想像のことを言っているのではないのであります。同氏の説明に耳をかたむけていただきたい――《いずれにせよ、懸賞付人間および理想人間を言葉に翻訳するとすれば、こういうふうに言えようか――それはあらゆる個人的資質の調和的最大値であり、したがってそれは、良い響きをたてるという点ではきわめて似かよっているとしてもなお、ちょうど音色のひとつひとつが異なるように、個人個人によって違っているのである。いま、ハニホヘトイロハのうちのどれかの音階の曲、たとえばイ調で作曲された曲を変ロ調にうつしかえるとしたら、その曲から多くの

ものを奪ってしまうことになる。だがそれとてもなお、みなちがったふうに作曲された子供の本性をみな同じ音調に移しかえてしまう教育者のばあいほど多くのものを奪いはしないだろう。》（§31）

理想人間をひとりひとりの個人のなかに発見しようとするこの思想、言いかえれば、ひとりひとりの人間のなかにひそむ独自の理想人間を発見し、ひとりひとりがそれぞれ独自にその懸賞付の自己そのものをめざしていかねばならぬというこの思想は、ジャン・パウル氏の教育論のなかに登場する個性、自由、主体的決断、等々の概念に、きわめて具体的な内実を与えている。そしてこの点こそはジャン・パウル氏のもっとも積極的な点、いやそれどころか革命的な点でさえあり――少なくとも、彼の痛烈な皮肉や諷刺やユーモアにまさるとも劣らぬ革命的な要素であり、これらの良き伴侶である――と我輩は思うのであります。彼の教育論が、総じて公教育というものから目をそむけ、教育概念から共同体による教育、ないしは例の就任演説者をして言わしむれば時代精神と民族精神による教育を追放しさえしたことと相関連しつつ、この点を強調しておく必要があるでありましょう。なぜなら、危機的な激動期にはつねに、支配体制は、共通の理想像を説教することによって統合をはかり、それなりの美名をもった種々の外的拘束によって自由・自発性・主体的決断などを弾圧管理しながら危機を切りぬけようとするものであって、この意図の実現はなによりもまず公教育の再編の強行という道に求められるものであるからこそ、いわば教育勅語的状況を潜在的本質とするこうした危機の時代に、ブルジョワ社会が金科玉条として表看板にかかげながら決してその実現をゆるすことはなかったしこれからもまたゆるすことはないであろう自由な人格の全的な解放という理念をあらためて追求することは、じつにただならぬ重みと危険性をふくむ作業であったと言わねばならないのであります。このことと、ジャン・パウル氏の視線が官許の公教育に背を向けつ

つも自由な人格を〈わたし〉としてではなく〈われわれ〉として形成していくところまではついに届きえなかったこととは、おのずから別の次元の問題として切りはなして考えられねばならないでありましょう。

第六回講義

休　講

第七回講義　註

前回は休講したわけですが、休講のあとでいきなりすぐに平常通りの授業をはじめることは、おたがいに肉体的にも精神的にもよろしくないので、きょうのところはまずウォーミング・アップの意味で、プリントを配るだけにしておきたいと思う。この授業のための「註」であります。これまでにもすでにいくつか出てきたが、これからも、行の右側に(13)(205)等々のしるしがついておるばあいには、かならずただちにこのプリントを参照し

ていくそう理解を深めてくれるよう、希望してやまません。それでは、きょうはこれで……。

註

(1) *Levana oder Erziehlehre von Jean Paul.* Zweite, verbesserte und vermehrte Auflage. 3 Bändchen. Stuttgart und Tübingen in der G. J. Cotta'schen Buchhandlung 1814.

なお、現在では、Jean Pauls *Sämtliche Werke.* Historisch-kritische Ausgabe, herausgegeben von der Preußischen Akademie der Wissenschaften. I. Abteilung 12. Band. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar 1937. S. 69ff. のほか、比較的入手しやすいものとしては Jean Paul : *Werke*, herausgegeben von Norbert Miller. Band 5. Carl Hanser Verlag, München 1963. S. 515 ff. にも収められている。本論の底本としては一八一四年刊の Cotta 版改訂増補版を用いたが、引用にさいしてはいちいちページを示すことはせず、節（§）の番号を付記しておいた。これは、右の三種のテキストに関するかぎり、共通である。（ただし、たとえば *Jean Paul's sämtliche Werke*, in 33 Bdn. Berlin, bei G. Reimer 1840–1842. の第二二、二三巻に収められたものは、§9と§24の脱落を訂正しているため、それ以後の節の番号が順送りにずれている。）

(2) Vgl. Eduard Berend : *Einleitung zu* : *Jean Pauls Sämtliche Werke.* Historisch-kritische Ausgabe. I. Abteilung 12. Band. S. XX.

(3) ただし、女王は Caroline だったのにたいして妻のほうは Karoline と綴られる。

(4) Wolfgang Harich（一九二二―　）には、『哲学的エゴイズムにたいするジャン・パウルの批判』*Jean Pauls Kritik des philosophischen Egoismus.* Suhrkamp Verlag〔Frankfurt am Main 1968〕.）という興味ぶかい仕事がある。これは、レクラム文庫（ライプツィヒ）の一冊、Jean Paul : *Kritik des philosophischen Egoismus. Satirische und philosophische Beiträge zur Erkenntnistheorie* 1967. の解説に手を加えたものである。なお、釈放されたのちのハーリヒのもうひとつの著書、『革命的焦躁にたいする批判のために』（*Zur Kritik der revolutionären Ungeduld. Eine Abrechnung mit dem alten und dem neuen Anarchismus.* edition etcetera, Basel 1971.）は、現代の革命的反対派にたいする貴重な批判のひとつである。

(5) Walther Harich : *Jean Paul*, H. Haessel Verlag, Leipzig 1925. S. 638–639.

(6) Einleitung zu : „*Jean Paul. Ein Lesebuch für unsere Zeit*" von Wolfgang Hartwig. Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar 1966. S. XLIX.

(7) Vgl. Walter Höllerer : *Nachwort zu 5. und 6. Band der*„ *Jean Paul. Werke*", Carl Hanser Verlag, München 1963.

Bd. 6, S. 1349. なお、Carl Reinhold : *Worterbuch zu Jean Paul's Levana oder Erziehungslehre.* Leipzig 1809. は、二年後に廉価版（第二版）が出るほどの売行きを示した。

(8) 「欠如詞」については、エルンスト・ライズィ著・鈴木孝夫訳『意味と構造』（研究社、一九六〇年）五〇ページ以下を参照。

(9) Max Kommerell : *Jean Paul.* Dritte, unveränderte Auflage. Vittorio Klostermann, Frankfunt am Main 1957. S. 97-98.

(10) 本来ならこの一節は「註」の部類に属すべき性質のものである。しかし、「註は本文の一部なり」(Jegliche Anmerkung gehöret zum Texte selber.[11]) というジャン・パウルの根本精神にのっとって、本文のなかに組みこんでおいた。

(11) このような言葉をジャン・パウルは書かなかった。

(12) Vgl. Georg Lukács : *Skizze einer Geschichte der neueren deutschen Literatur.* Aufbau-Verlag, Berlin 1953. S. 38 ff.（邦訳=『ドイツ文学小史』岩波書店、一九五一年。四六ページ以下。）

(13) 註のための註――教材の出典等についての註釈は一〇六ページにあります。

第八回講義　時代精神の超克

諸君！　さていよいよ、レヴァーナの心臓部を研究するところまで来ました。この研究をきわめて密度の高いものとするために、我輩の饒舌をできるかぎりつつしんで、レヴァーナ自身にできるだけ多く語ってもらうことにしたいと思うのであります。

さて、民族精神とならんで時代精神がきわめて強力な教育者であることについては、たびたび登場いたしましたあの教育無用論者が就任講演で述べ、また多数の学術経験者・有識者・文化人諸氏がくりかえし指摘しておられるのでありますが、わがジャン・パウル氏は、むしろこれにまっこうから挑戦して、教育の目的の本質的なひ

とつは時代精神の超克である、ときっぱり断言しているのです。《教育技術の目標は、われわれがそこに至るいくつかの確かな道を測定する以前に、まえもって明瞭に堂々とわれわれを支配下においていなければならないわけだが、その目標のひとつは、時代精神の超克である。子供は、現在のためにだけ教育されるべきではない――なにしろ、この現在は、そうでなくても不断に無理やりそれをやっているのだから――むしろ未来のために、いやそれどころかしばしばさらに、すぐあとの未来にすらさからって、教育されねばならないのだ。とはいえ、ひとは、みずからが避けたがっているその精神のことを、知っておかねばならぬ。だから、どうか、

第三章　時代精神について

というくだりを、許可していただきたい。》（§32）

こういうかたちではじまる第二破片第三章で展開されていく考察は、だがしかし、ジャン・パウル氏の全作品、つまり全思想プラス全表現の根底にかかわる姿勢の確認をふくんでいるのであります。ひとくちに言えば、それは、物事を決してありのままには見ないという態度である。彼の表現がすべて物事をありのままには表現しないように、彼はすべての物事を歪めて見るのである。たとえば、あのカッツェンベルガー博士があらゆる「畸型」を異常な熱心さで蒐集・研究していることなどを、思いおこしていただきたい。これについてくわしく知りたいかたは、昭和四十四年三月発行の京都大学教養部『ドイツ文学研究』報告第十七号一ページ以下、「ジャン・パウルの現実否定と小説形式――『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』覚え書」という好個の参考書が出ておるのでぜひご参照ください。[10] なんら畸型でなどないはずのものが畸型と呼ばれ、いちばんのヒトデナシがいちばん偉

い人間みたいな顔をしている世の中で、「畸型」に関心と偏愛をもち、物事をことごとく歪めて見るということは、何を意味するでありましょうか？　つまり――ジャン・パウルは物事をどのように歪めるのか？　どの方向にむかって歪めるのか？　簡単に言えば、その物事の単独的・静的な相貌をそのまま受けとって安心（あるいは恐怖）してしまうのではなく、その物事にたいする反対物を措定することによって、その物事とその物事の状況とを、ともに流動させ、意識化する方向にむかって、であります。

《われわれの今の時代は》とジャン・パウル氏は言います、《たしかに、ひとつの批判時代（クリティシーレンド）であり危機的時代（クリーティッシュ）である――信じたいという願いと信じることが不可能だという事実とのあいだを漂いながら――たがいに反抗しつつ活動しているいくつもの時代からなるひとつの混沌（カオス）である。――しかし、たとえ混沌たる世界であっても、ひとつの点をもち、その点のまわりをめぐる運動と、そのための空間をもっているはずだ。純粋の単なる無秩序や争議などというものは存在しない。そういったものはどれも、その反対物を前提としているのであって、そうでなければそもそも始まることもない。現在の紙の上と頭の中の宗教戦争は――これまでのものが炎熱と嵐と荒廃と豊穣とにみちた雷雨だったのとはちがって――むしろ北極光（いっそう高い、いっそう冷たい天の一角でおこる雷雨）に似ており、雨をともなわぬ夜の闇のなかで、落雷もなく鳴りひびく光にみち、さまざまな形成と寒気にみちている。だから、向うみずな自己意識――この時代の存在――が、根源的な人間の性格と精神の性格を、ひたすらいっそうに、そしてさらに大胆に、形成しつづけ、養成していかないことがあろうか？　そして、人間の性格、精神的な覚醒は、いくら覚醒しても覚醒しすぎるということはありえないのではあるまいか？》（§36）

たしかに、現在は、そうした希望をゆるさないほどに悲観的な状況である。しかし、その状況は、決してすでに

完結し固定してしまっているのではない。こうジャン・パウル氏は考えるのであります。覚醒は、自己意識は、危機の意識化を、そして完結の拒否を、養分として必要とし、また後者は前者を必要とするのです。もちろん、ジャン・パウル氏は、こんなことを明言してはいない。しかし、危機の時代ないしは批判時代の新しい現象を古い尺度ではかってその意味をとらえそこねながら、その新しさがもつ危険性だけしか目にはいらないほど既成性のなかに根をおろし、真に危機を直視し意識化することを避ける〈静止〉の姿勢、現実を無意識に完結態としてとらえる姿勢、これをジャン・パウル氏は拒否するのです。たとえ、未完の状況として現在をとらえる姿勢の持続が、ますます危機に身をさらしつづけることを意味するのであろうとも。――《だがしかし、どの時代も、自分自身は前の時代よりもひとつ高い光の段階にのぼっていてしかもそれは心にとって無害であると思いこみながら、なにか新しい光があらわれると、それを公序良俗を害する炎であるとみなしてしまう、というのは、つねにくりかえされるなんとも奇妙な現象である。ひょっとすると、光のほうが熱よりも速度がはやく、頭の切りかえのほうが心の切りかえよりも速いので、光があらわれるといつもその思いがけない唐突さのために、まだ準備ができていない心にとっては、敵対的なものにみえてしまうのでもあろうか？〔……〕いまの光の進行は、少なくとも、静止をゆるすくらいなら、むしろそれ以外のすべてをゆるすほどである。だが、この静止のみが、害毒を生み、それを永遠のものとするのだ。ちょうど、静止した空気に雷雨や嵐が侵入してくるように。たしかに、どういうやりかたでこの朦朧たる発酵状態のなかから、われわれが知っているものよりも明るいひとつの時代が準備されていくものか、われわれにはそれを確定することなどほとんどできない。なにしろ、変化をきたしている時代はみな、したがってわれわれの時代もまた、やがてなされる精神の播種のためのひとつの新しい精神的風土

にすぎないのだから。この風土のなかへどのような外国種の種を天が投げおとすか、われわれには知るよしもない。》（§36）

そもそも、諸君、安直な未来像などというものは、現在の事態がほんの偶然の手違い等々から出た一時的な不都合にすぎないのであって、オレについてくれば必ずこれは是正される、ということを信じこませようとする意図によって組み立てられているもので、現在の状況を意識化しようという志向、現実を完結したものとしてはとらえまいとする志向とは、いっさい無縁なのであります。ですからして、ジャン・パウル氏は、ドイツの夜明けだのヨーロッパの朝だのを美しいイメージで描いて現実の暗さから目をそらす手伝いなど、まっぴらごめんこうむります。そして現実にたいしては、さまざまな差別支配によって生みだされる被差別者たちの姿とその呼称、「畸型」、「変人」、「貧民」、「気狂い」、「下僕の下女=女性」等々の姿と呼称を、これにふれこれを口にすることをタブーとするのではなくむしろ積極的にとりあげ描きだしていくことによって、現実に肉迫するのです。

新しい光を害毒として否定しさったりしないこと、そして現在の現実だけがありうる唯一の現実であるなどと考えないこと――これがジャン・パウル氏の原則であります。この原則のもとで、結局のところ教育はどういう心がまえで自己の仕事をおこなうべきなのか――ジャン・パウル氏のさしあたっての確認は、こうであります――《だが、われわれの子供たちや子供たちの子供たちが、この冬の世紀を通りぬけてしまうまで、そして通りぬけてしまうということ――これが、われわれにとって重要なことであり、そして教育にとってはもっと重要なことなのだ。大きなさまざまな混乱（フェアヴィックルング）にたいしては、われわれは部分的な発展（エントヴィックルング）をもって立ちむかわねばならぬ。未来にたいして、いやそれどころかさしせまった時代にたいして、子供は三通りの力からなる対抗力によって武

装させられねばならぬ。意志、愛情、信仰の三つの無力化に抗して。》（§37）　ジャン・パウル氏の歴史観が単なる客観主義的進歩主義とははっきり一線を劃していることも、ここから明らかでありましょう。

時代精神の超克という教育の基本理念を実現していくための具体的な実践については、いずれおいおい見ていくことにいたしたいと思う。きょうの授業はこれまで。ああ、それから、教卓のうえにこんなノートの忘れ物があったが、心あたりのひとはいないかね？

――忘れ物のノート第九十五ページ以下に書かれていた「時代精神の超克の一実例」と題する覚え書――

廢姓廣告

人類が社會的動物となって以來、交際上の必要で、お互に「名」といふ符號を附ける事になった、（自分で自分の身に符號を附けて居るのは動物中、人類ばかりであるやうだ）それから社會が段々と進歩して、種族が出來た上、家系に重きを置くやうに成つたので、遂に「姓」とか「氏」とか云ふものが出來たのである

これを冷静に考へて見ると、人類が各々「名」といふ符號を附けて居る事は、相互に便宜であり必要であるが、「姓」とか「氏」とかは無くても好いものである、（現に我國には姓のない御方がある）抑も種族といふ觀念が生じたのは、利己排他がモトで、此思想から戰鬪が起るのであり、家系を重んずるといふ觀念から差別心が出來たのである、されば苟も新思想家を以て世間に立たうとする者は、その傳統的因襲に囚はれないで、斷然、斷乎、この姓氏を廢棄すべしであらうと信ずる

然し、其新思想家諸子が姓氏を廢棄すると否とは諸子の自由であり賢愚であるのだが、斯く唱道する予は「隗より始む」の例で、今後「宮武」といふ姓を用ゐない事にした、それには右に述べる理由の外、「宮武」といふ文字そのものが嫌ひなのである、「宮」とは迷信的の文字であり、階級的の稱呼である、（此外に「宮」を男根切斷の義にも使ふ、これもイヤだ）次に「武」は武道武術の武であり、武威武力の武であつて、予の最も嫌ひな武斷政治の武である、それから「宮武」の二字は何を意味するのであるか、それも判明しない、斯かるイヤな文字を我名の上に冠するのは、予の不快とする所であり、又無意義な事であると思ふ、その上同姓者の中には予の嫌ひな人物も亦少くない。

彼是の旁々で予は今後「宮武」の姓を用ゐない事にした、現代の法制上、戸籍には「宮武外骨」とあり、諸官省からは宮武外骨と呼ばれるであらうが、それは彼等の御勝手であり、又此方も法治國民の一員たる以上は、無法に反抗もしないが、それでも自己署名の場合には「宮武」の二字を小さく書くつもりである

右の次第であるから、今後予に宛てる郵便物の表書には、單に「外骨様」と書くか、それがアマリ簡單でヘンだと感ずるのならば「半狂堂外骨先生」でもよろしい、此事を承知の上で故らに「宮武外骨」と書いて來たと認定すへき郵書に對しては返信をしない、又對坐の際に「宮武さん」と呼ばれても應答しない事にした

但し此宣言が世間に知られない間は已むを得ないから、外骨の上に（宮武）と括弧を附けて置く、早く天下の外骨に成りたいものである

（宮武外骨『一癖随筆』、半狂堂、大正十一年四月十日発行、二六ページ。）

第九回講義　女子教育論

ちょうど前回にお話ししたところまでで『レヴァーナ』の第一小冊は終わっていて、しかもこの本の本質的な内実は、第一小冊でほぼ尽くされておるのであります。しかしながら、残されたスペースの関係上、なお第二小冊以下についてもひきつづき詳しく論ずることにいたしたいと思う。というのも、我輩にわりあてられたスペースはもうとっくの昔に超過しているのでありますが、原稿料とひきかえで書くのではない原稿ほど――ちょうど憂鬱になって湿気をおびたときのジャン・パウル氏式自記毛髪湿度計（Polymeter）ないし長詩（Streckvers）のように――いくらでも長くひきのばしたくなるという我輩の性癖は、なるほど前期資本主義社会のもっとも典型的な職業作家たるジャン・パウル氏の職業精神にはいささか反するかもしれぬとはいえ、後期資本主義の体制擁護のための個別専門馬鹿養成用の官費を少しでも多く官域外の印刷所その他に放流（より正確にはその源泉へと還流）させるという点において、決してジャン・パウル氏のおしかりを受けるような行為ではない、と個別専門馬鹿要員のひとりたる我輩は確信しておるのであります。

さてそこで、今回の本題たる「女子教育論」にはいるに先立って、出来るかぎり冗長に構成上の註釈を加えておくなら、『レヴァーナ』第二小冊は、本題たる「女子教育論」にはいるに先立って、出来るかぎり冗長に書いて原稿料をつりあげようとでもしたかのごとく、まず巻頭に「第三破片のための附録」（Anhang zum dritten Bruchstücke）と「第一小冊の滑稽附録ならびにエピローグ」（Komischer Anhang und Epilog des ersten

Bändchens）というふたつの脱線部分をもっているのでありまして、これについてはここでぜひ一言述べておかねばならないでありましょう。というのも、このふたつの文章は、いずれ劣らず、ジャン・パウル氏がもっとも得意とする破天荒な設定になっているからであります。「身体的教育について」と題された「第三破片のための附録」は、出産三カ月前の妻をもった新婚の夫にあてて著者自身が書いた手紙、ということになっていて、ジャン・パウル氏が自分の三人の子供を育てるにさいしておこなった具体的な教育法がそこで詳細に述べられております。もうひとつのほうは、キリスト教徒として神をうやまいつつ生きた故ゲレルト教授、つまり一七一五年から一七六九年まで生きて十八、九世紀のドイツ文学に大きな影響をあたえたあのクリスティアーン・フェルヒテゴット・ゲレルト氏でありますが、その故ゲレルト氏にあてた夢の手紙で、差出人たるジャン・パウル氏は、自分の息子のための家庭教師を世話してくれるよう、この大先輩に頼んでいるのです。《最愛の故ゲレルト！　小生はうちのマックスのために家庭教師をひとり必要としております。それといいますのも、小生は目下、教育について書いており、したがって教育のための時間が一分ものこっていないからであります。ちょうどかのモンテスキューが、法の精神を起草するために高等法院長の地位を降りざるをえなかったようなものです。》　すでにお話ししたような次第でジャン・パウルがもっぱら私教育の問題を追究したことを考えるなら、ここで「家庭教師」論が展開されているのも当然と言えるわけであるが、そのことはさておくとして、この種の滑稽な設定は、『レヴァーナ』のなかにまだまだほかにも見られます。第三破片の第一章は、「人間ならびに教育の始まりについての脱線」と題されておって、この章に属する§41から§44までが全体としてひとつの長い脱線なのでありますが、そのなかで論じられていることはといえば、脱線どころか、新生児および幼児教育（および妊産婦の教育

的役割）についての重要な指摘にほかならないのであります。あるいはまた、第四破片第五章は、「ある領主が娘の御養育係長にあてた秘密指令」ですが、じつはこれは著者がみた夢であって、ユスティニアンというこの殿様の娘はテオーダ、つまり例のカッツェンベルガー先生の娘と同名である。さらにまた、この夢の手紙の章につづく第五破片第一章は、「君主の養成」といういかめしい題名をもっているのですが、なんとこれが、またまた手紙、著者が某領主の皇太子御養育係にあてて書いた手紙ということになっている。ただし、今度は夢ではなく本当に郵送したのだ、ということわり書きまで付されております。そして、《もっとも大胆な人間を養成したければ、大胆なやりかたで養成せよ！　大胆な画家だけが大胆な顔にぶつかる、とラヴァーターは言っている。》――というようなことをあれやこれやと大まじめで正味六十四ページ（四八一―五四五ページ）と三つの誤植をついやして蜿蜒と書きつらねたあとで、つぎのような「追伸」があらわれるのであります。《追伸　皇太子御養育係殿、飛脚便の不足のため、残念ながら貴殿にあてた小生の手紙は、書きあがったまま、レヴァーナの初版全部が出おえるまで置きっぱなしにされ、印刷されはしたのですが発送されはしませんでした。が、ついに、幸いにも、第二版が出るとき、ひとりの若い、だがいくつかの宮殿で馘になった皇太子御養育係が小生を訪ねてまいりまして、この手紙を貴殿に届けてくれると申しております。それはともかくとして、この男は毎日一時間半にもわたって事態をのろい、歯にきぬをきせずに断言して言うことには、自分は皇太子御養育係などよりむしろ皇太子になりたいくらいだ。なにしろ、皇太子は自分自身をダメにするだけだが、皇太子御養育係は他人もいっしょにダメにするのだから、というのです。貴殿にあてた小生の長い手紙を、彼はインクの屑紙だと笑いとばし、あなたは何かを、だが重要なことをお忘れになっておられる、と言うのです――つまり、……》云々。

さて、本題の女子教育論に移ることにして、まず、ジャン・パウル氏がここで言う「女子教育」とは何か？――ということから問うてみなければなりますまい。同氏は述べております、《女子教育というとき、私は一度に相矛盾する三通りのことを理解している。第一に、ふつう女子がおこなう教育。――第二に、男子と比較して女子に適した専門的な天職。――第三に少女の教育。》（§75）　こうした定義づけのあと、まず第一の「ふつう女子がおこなう教育」についての考察がなされるわけであるが、ここでまたもや著者は形式主義的技巧をこらして、五人の子供の申し分ない母親たるマダム・ジャクリーヌがジャン・パウル氏にたいしておこなう懺悔、という想定で話しをすすめていきます。それからつぎに、教育者として適している女性の資質について論じられ、最後に「少女の教育」の章になって、将来さきに見られた二通りの教育者となるはずのこの当面の被教育者を手がかりにしながら、女子教育全体の問題が追究されるのであります。

ジャン・パウル氏の作品を読めば、この作家がどれほど女性という存在を美しくナイーヴで愛すべきものとしてとらえていたか、しかもそれでいてこのとらえかたのなかには、愛玩動物や装飾品や女奴隷を見るような目つきは露ほどもなく、女性を描くさいのこの作家のまなざしに真に人間的な共感と愛情がどれほどみちあふれているかが、よくわかって、爪のアカでもせんじて飲んでみようかという気持になるのでありますが、『レヴァーナ』においてもまた、この基本的な観点はなんら変わっていないと言ってさしつかえありますまい。もちろん、そこには、例のゲーテ先生だのベートホーフェン氏だのシラー氏だのをもふくむこの時代の文士・芸術家諸氏のなかに根深く巣喰っていたらしい古典主義的・観念的・ロマン主義的な女性崇拝の色あいがなくはありません。故ルカーチ教授などの説によると、ジャン・パウル氏はあまりにも民衆的でありラディカルであったがために、かえ

ってゲーテ、シラー両氏その他の貴族主義的ヴァイマル・グループほど時代を超越することができず、貧困な現実と妥協してしまった、ということになるらしいので、[12] ジャン・パウル氏が、女性崇拝というごくとるに足らぬ問題でにせよともかく偉大なヴァイマル・グループと見解をともにしていたことは、ジャン・パウル氏にとってせめてもの救いであった、と言えないこともないわけですが、周知のように故ルカーチ教授は、若いころの猛勉強がたたって、中年以後、手は書痙になるわ、視力は衰えるわ、頭は動脈硬化にかかるわ、で、冗長退屈不可解なジャン・パウル氏の作品など読めどもわからず読む気もせず、何冊かの小説の「緒言」だけ拾い読みして適当にわかったふうなことを言ってみただけですから、同教授のジャン・パウル批判など、本気で相手にする必要もないのです。しかし、せっかくジャン・パウル氏を自己の労作のなかにとりあげ、たとえ将来同氏の作品が分相応にことごとく忘れ去られ「無名墓地」行きになってしまってもその名前だけは歴史にのこるように、という配慮をご自身の不朽不滅の著書のなかでおこなってくださった故ルカーチ教授のご厚意にむくいるため、僭越をもかえりみず我輩の私見を申しそえるなら、たしかにジャン・パウル氏の女性崇拝のなかには、ヴァイマル一派のそれと共通の観念論的発想がないとはいえず、ことに小説作品の形象としての女性像には、そういう観念性がにじみ出ているわけですが、それにもかかわらず、現実の人間的諸関係に触れぬままでの女性の美化、「人間ならぬもの」としての女性の原像みたいなものへの拝跪は、ジャン・パウル氏には薬にしたくも無いのであります。彼は、女はオンナらしく、という例の要求とは逆に、女子教育の場合にも男子と同じ理念を適用すべきであることを随所で強調します（たとえば、「朗かさ」の重要性）。つまり、ジャン・パウル氏は、〈女性〉性だけを抽出してそれを男性にはないものとして崇拝し拝跪するのではなく、男と女とを同一の次元のなかで、そしてさらに

重要なことには同一の現実のなかにおかれた存在として、見るのであります。ということは、ただのっぺらぼうに同じ教育原理の適用を主張して両者のおかれている関係をあいまいにしてしまうのではなく、この関係そのものを見つめるなかで女子教育の問題を追究している、という意味にほかなりません。

「女子教育」を論じた第五破片全体が、女性論ないしは男女関係論として展開されていることに、どうか注目していただきたい。著者は、一貫して、女子教育というものを男性と女性との関係のなかで、男女の社会的な位置とのかかわりにおいて、考えようとしているのであります。女性がどのような目的のために、どのようなものにとりかこまれて教育されるか、ひとつそこに配った教材④（番号が抜けてますが、この左側のものがそれです）なども参照しながら、ジャン・パウル氏とともにじっくり考えてみてほしいと思う。――《ある時代が腐敗して

○新發明 **水漉機械**（みづこしきかい）　惡病豫防之器（これらふせぎのしな）

鎔鑛製　大一圓廿五錢　中一圓　小七十五錢
ブリキ製　大五十錢　中三十五錢　小二十五錢

此器械は水中に含有する腐敗物を去り清潔にする故に養生家一日も缺く可らざる良器也

東京日本橋區田所町十七番地
製造販賣所　鑛物舗　柏屋　濱田清次郎

（明治十四年七月廿八日『東京繪入新聞』第千八百卅五號所載）

自由新聞紙發兌の廣告

右新聞紙發兌出願中に付允許濟發行の上は江湖諸君の閲覧を乞ふ
東京銀座三丁目十九番地
自由新聞社

（明治十五年三月下旬諸新聞所載）

●求婚廣告　山形新聞より轉載

一私娘年は十六歳にして色白く髪は黑く長く候事
一未だ男に肌をふれず事なく
一中肉にて在郷には無類と申す評判
一學識才智等も日本婦人にしては可なりあり
右に似寄の婿有之候はゞ諸君御世話被下度奉願上候也

山形縣最上郡上柳田村　高橋五郎兵衛

（明治十五年五月二十日『此花新聞』第百八十三號所載）

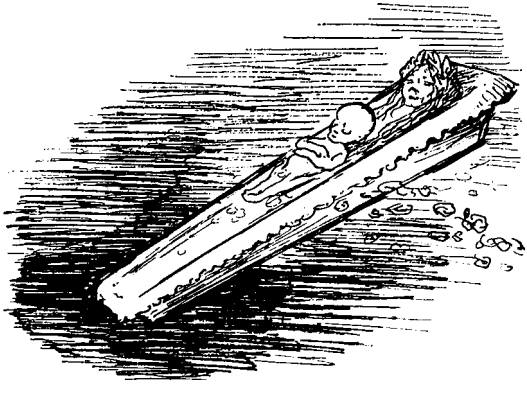
いればいるほど、それだけますます女性は軽蔑される。統治形態ないしは統治の悪形態の奴隷的性格が多ければ多いほど、それだけますます女性は下僕の下女となる。いにしえの自由なドイツでは、女性は神聖なものとみなされていて、彼女らの似姿であるドドーナの神殿のジュピターの鳩たちと同じく、神託をおこなった。スパルタやイギリスやまたあの美しい騎士時代には、女性は、男性の高い尊敬という星章を身につけていた。ところがいまでは、女性はたえず統治形態とともに上昇したり下落したり、高貴になったり劣悪化したりし、一方この統治形態というものはつねに男性によってつくられ維持されるのだから、女性が男たちをまねて、かつ男たちのために教育されるということ、男の誘惑者たちがまず女の誘惑者たちをつくりだすということ、そして女性の劣悪化はすべてただ男性の劣悪化の余寒でしかないということは、まったくわかりきったことではないか。》（§84）

このように、現実の男女の社会関係の認識ないし意識化のうえに立って女子教育の問題をとらえようとしたジャン・パウル氏は、両性の自然的な差異を前提としながら両者の平等を確認しているジャン＝ジャック・ルソー氏の『エミール』第五篇の精神を、ルソー氏の名前上の息子にふさわしく、継承発展させていると言えましょう。でありますからして、このジャン・パウル氏が「母」という存在をも「人間」との関係において考察し、もちろん自分ではそうと気づかぬまま、結婚とは何か？　母とは何か？　子供を生み育てるとは何か？　そしてそれらは人間であることとどうかかわるのか？――というもっとも根底的な問題の領域に足をふみいれてしまっているのも、理由のないことではないのであります。《ただ、母である以前に、そして母となってのちにだけ、ひとはひとりの人間である。だが、母という規定、あるいは結婚しているという規定さえもが、人間であるという規定にまさることはできないし、あるいはこの規定の代理をすることもできない。むしろそれらは、人間であるという

規定の手段であって目的ではないはずだ》（§89）――社会の人間関係の総体がわがマルクス氏の言う意味においてその社会の男女関係のなかにもっとも集約的に表現されるとすれば、社会において軽蔑され圧迫された存在、下僕の下女――言うまでもなく、この「下僕」というのは封建社会・階級社会におけるわれわれのことですが――この二重に差別抑圧された存在のなかに、あの『巨人』のリアーネや『見えないロッジ』のベアータや『生意気ざかり』のヴィーナや『ジーベンケース』のナターリエや『カッツェンベルガー』のテオーダといったような美しい姿を見出したジャン・パウル氏が、時代精神の超克を根本理念とする教育というもののなかでその女性という存在にきわめて重大な意味を与えながら……え？　なんですか？　なにか質問ですか？

女子学生R――いま問題になっている問題は、あたしたちにとって非常に重大な問題だし、あたしたちだけじゃなくて男性にとっても重要な問題だと思うわけですけど、先生は、ジャン・パウルの見解を解説するというかたちでこのかん一貫して一定程度進歩的な態度をとっておられるわけだけど、まだまだ問題が多いわけで、われわれとしては、先生が口にしているその言葉の内実を問うていかなければならないし、あたしたちの言う女性解放、女性差別糾弾と、先生やジャン・パウルがぐじゃぐじゃ語っている女性論とを徹底的に対決させていくなかから、無意識のうちにいだかれている差別意識を徹底的に糾弾していく必要があると思うんです。だいたいにしてからが、結婚することと人間であることとを区別したジャン・パウルたらいう三百年も五百年も大むかしの男性がちょっと進歩的やったから言うてやでぇ、アホみたいに……あ、アホちゅうのは差別言辞ですから、深刻に自己批判しつつ撤回します。ちょっと進歩的やったから言うてやでぇ、ええと、ちょっと進歩的やったから言うて、すっかり喜んでしもて、「未婚の母、万歳！」てなことでも言い出しかねんような顔したはるけど、ええかぁ、

そういうモノワカリのええ、モノのわかったような顔したがるキョーシがいっちゃん悪質なんや。ほら、見てみよし、たとえばやなあ、教材⑤みたいこんな絵ぇ見たら、「こら、未婚の母の末路あらわしとんのと、ちゃうかいなぁ」てなこと、思てるのやろ。そんなん、口先でなんぼきれいごと言うたかて、「未婚の母には子供を育てる資格がない」てな判決くだしよった裁判官と、どこが違うのえ？　なんぼマルクスの名前ひっぱりだしたかて、東大安田講堂の暴力的封鎖解除にかりだされた機動隊の働きをテレビで見てからに、「なろうことなら菓子折もって御礼にいきたい」言うた有名なマルクス学者がおったこと、あんた知ってるやろ。学園闘争やら労働者の闘争やらで、もっとも戦闘的な部分の取締りを当局に要求したり、警察に売りわたしたりしょるのんも、ゴリゴリの右翼と、それからこの自称マルクス主義者や。マルクス主義屋や。ええか、あんたのアタマのなかにはですね、無意識のうちにも差別意識がいっぱいつまってるんですよ。なんだかんだ、ウンヌンカンヌンなんて、きれいごと言ってらしても、ひょっとした拍子に、それがドバーッと出てきちゃうんですよ。ですから、あたくしは、ここで、この時間を、た



教材⑤　？

だちにクラス討論に切りかえ、この場に出席しておられるすべての学友のみなさんが、われわれ女性差別糾弾実力行動隊とともに、積極的に女性差別ととりくむ討論を真剣に展開され、われわれとともに先進的に闘っていかれるよう訴えて、アピールにかえたいと思います。センセ、どないすんの？　黙ってんと何とか言いよし。――

我輩としては、ですね、クラスの総意がクラス討論を望むのであれば、べつに、その、異論はないわけであって、うん、じゃあ、きょうはひとつ、自習問題を出して、えーと、これでやめることにするから、まあ、家ででもやってみてください。さっきちょっとお話ししたわけですが、つまりその、§101で作者が夢でどこかの国の君主になって、娘の御養育係長に教育上の秘密指令を与える手紙を書きおえて、夢からさめるくだりです。あ、それから、問題を配るまえに、この講義で使った教材の出典についてちょっと言っておきますから。

教材①　（宮武）外骨『文明開化第二篇・広告篇』大正十四年十月五日、半狂堂、二〇ページ。
②のための補助教材（独文）　資料提供＝好村冨士彦氏。
③　Jean Paul : Die wunderbare Gesellschaft in der Neujahrsnacht. Mit 27 Federzeichnungen von Alfred Kubin. R. Piper & Co. Verlag, München 1921. S. 11.
④　（宮武）外骨、前掲書、八一および八二ページ。
⑤　Jean Paul/Alfred Kubin, a. a. O. S. 34.
⑥　出典は該当箇所に明示されている。
⑦　Jean Paul/Alfred Kubin, a. a. O. S. 27.
⑧　一九六九年一月二十二日、©京都大学発行のビラおよび掲示。（著作権者のご好意により引用させていただきました。）
⑨　一九七三年二月二十六日、©京都大学総長前田敏男著、掲示。（右に同じ。）
⑩　（宮武）外骨、前掲書、八四ページ。

自習問題：次の文を和訳せよ。（所要時間・５分）

Mit dem Briefe endigte ich den Traum und stand auf. Da ich aber mit der Nachtmütze auch die Krone ablegte und wie gewöhnlich privatisierte: so würde ein Kunstrichter, der etwas tadeln wollte, weiter nichts beweisen, als wie unbekannt oder gleichgültig ihm Kants Grundsatz ist: daß man einen entthronten Souverän durchaus wegen keiner von ihm auf dem Throne begangenen Fehler bestrafen könne. Etwas anders ist, wenn ich wach bin und fehle.

模範解答（必ずしも誤訳がないとはかぎらない）

この手紙とともに私は夢を終えて起きあがった。だが私はナイト・キャップといっしょに王冠をもぬいで，いつものように私人にかえったわけだから，だれか評論家がどこかにケチをつけたがっているとしても，彼はカントのつぎのような命題に自分がどれほど無知でありあるいは無関心であるかということ以外に，なにひとつ証明できないであろう。つまりその命題とは，退位した君主を在位中に彼がおかした誤りのために罰することは絶対にできない，というものである。もしも私がめざめていて誤りをおかすのなら，はなしは別だが。

83

催物会場案内

【第一会場】シンポジウム「教員処分」をめぐって

――会場で配布された資料の一部――

その一　五月一八日午後、神戸大学講師松下昇氏は、連日「私服」が横行している神戸大学の学内において、学長および教養部長の「了解」のもとに、乱入した機動隊によって逮捕されました。この事実には、大学にかかわる者が見すごすことのできない、重大な問題がふくまれています。

すでに四日付で出されていたという「逮捕状」が、逮捕の根拠としている「事実」は、すべて神戸大学の大学闘争の過程で生じた、学内問題ばかりです。松下氏の行動は、大学の主体性において議論され、継承され、あるいは否定されるべきものではあっても、教授会の秘密審議や警察暴力の介入によって圧殺されるべきものではありません。したがって大学としては当然、警察が松下氏の逮捕を策していることが知られた時点で、ただちに、警察にたいして強く抗議しなければならぬはずでした。ところが神戸大学当局は、抗議しなかったどころか、警察にいそいそと協力したのです。警察の「喚問」に応じて多くの教授が警察署に「出頭」し、松下氏や学生たちにむかっては語らぬことを「供述」しましたし、当局者は、学内逮捕をも「了解」しました。神戸大学の悲惨な頽廃の進行は、とどまるところを知らない、といわなければなりません。

教授会の秘密審議、「広報」の犯罪的文体、警察への「任意」の協力――これらは教授たちの、自己責任を棚あげするための、防衛行動であると同時に、他方、惰性的・習慣的思考では対応しきれない闘争者にたいする、怨恨をひめた攻撃行動でありましょう。こういう教授たちの行動のみにくさは明らかですが、しかし問題は、こ

れにたいする抗議の声が、わたしたちのなかですら、けっしてたかくないことのほうにもあります。

わたしたち自身が、松下氏と並ぶ闘争者ではないことが、わたしたちに、さまざまな方角からの抑制をはたらかせているのでしょうか。しかし、大学闘争をうやむやに消散させ、新しく権力体制をかためようとする権力の志向が、（岡山大学にも見られるように）「処分」や逮捕＝拘束＝起訴というかたちをもとってきている現在、わたしたちは、もういちどわたしたち自身の志向や、連帯の可能性を、考えてみなければならないと思います。以下の資料は、そういう思考の一材料として、あなたに提出されるものです。

（『五月三日の会通信』号外、一九七〇・五・二六、一ページ）

その二　二一世紀の太陽を見てから死にたい、というのが一〇年来の私の願望である。一九〇九年（明治四二年）に生まれた私は、紀元二〇〇一年には九一歳を越える。今日ともしらず、明日ともしれない朝露のように消える、果敢ない人間の命のことを思うと、それは空しい願いのようである。しかし、紀元二〇〇〇年ころになると、日本の男子の平均寿命は八〇歳に伸びるだろうという話を聞いているので、私が切に願い、健康に注意すれば、かなえられそうな話でもある。そこで、この三月末に停年退職すると東京に移転し、古い女房と二人で新婚まがいの新居をつくり、私の第三の人生三〇年を始めることにした。

私は一九五四年（昭和二九年）二月に、自然科学史を担当する教授として、神戸大学に着任した、私の第二の人生二〇年は、神戸に来たときに始まり、間もなく終ろうとしている。神戸における二〇年のうち、最初の一五年間は、朝・昼・晩、ねてもさめても、科学史のこと（教育と研究）だけを考えておればよいという楽園であった。旧制高等学校に入学した大正一五年ころ、自分の生涯の仕事として科学史をやろうという決心をした少年の

日の夢がかなえられたからである。一九六九年（昭和四四年）から教養部長の仕事をするようになってからも、科学史をやる時間の余裕だけは残していたので、やはり楽しい人生であった。㊙部長として、紛争学生の総攻撃の目標となったが、そのことは、それほど苦にならなかった。打算のない学生の純真な行動に対決した思い出は、すがすがしい。他部長であったならば、教育者として、もっと異った対決の仕方をしただろうと思う。私は、乱正の知識人として、右顧左べんせず、強靱に・大胆に、私の信念のスジを通したつもりなので、悔いるところはない。乱世には、形式よりも内容を重んじ、現象の内奥を見て、剛毅に行動する人間が要求される。優柔不断は、最大の悪徳だ、と私は考えた。私は、つねに大学改革の方向を見とおして、ためらわずに前進した。慎重さをいちじるしく欠く行動があったと思うが、今も悔いはない。ミンナニデクノボートヨバレ、ホメラレモセズ、クニモサレズ、そういう人間であることで満足してきた。

私の第一の人生は、一九三二年（昭和七年）に東京大学の物理学科を出てから、一九五四年（昭和二九年）に神戸大学に来るまでの二二年間である。一九二九年（昭和四年）に大学に入ってから神戸に来るまで、二五年間を、東京の空を見て過ごした。それは、戦中・戦後の暗い日々であった。昼はある官庁に勤めていたので〔文化祭実行委員会註＝この人は大学卒業後、陸軍科学研究所、陸軍士官学校、中央気象台などで皇国の繁栄のためにご奉公したのち神戸大学に赴任して警察国家の繁栄のためにご奉公したのである〕、科学史の勉強は、日曜・祭日と夜だけに限られていた。その中で、初心を貫ぬこうと努めた。

私の第三の人生は、一九七三年四月から、第一の人生を過ごした東京の空の下で始まる。神戸における第二の人生では、アラユルコトヲ、ジブンヲカンジョウニイレズニ、我執を捨てて行動したが、今度は、方針を一八〇

度転換する。百歳まで生き抜くという目標をとげるために、あらゆることを自分を勘定に入れて、行動したい。二一世紀の第一年、紀元二〇〇一年の元旦の太陽の出るのを、千葉県の犬吠崎の灯台の下で見ようと決心している。第一の人生では、学問のために家庭を捨てていた。青虫のように地上をはいずりまわり、いわゆる〝苦学〟をした。第二の人生は、神戸に閉じこもって〝さなぎ〟のような地味な生活であった。第三の今度は、女房・子ども・孫たちを大切にしながら共存し、楽しんで学問に打ち込みたい。私は、いま、余生というのではなくて、蝶になって花にたわむれ、蜜をすい、天高く舞う、とらわれのない第三の実人生を出発しようとしている。

（神戸大学教養部『広報』No.37、昭和四八年四月一日、一三―一四ページ、M・Y「私の第三の人生三〇年が始まる」）

その三　この春から本学文学部へ配置換えになることがきまり、思い出多い教養部を一応は離れることになった。昭和三一年に南国は鹿児島から着任したのだから、実に一七年になる。その間、ずい分したいようにさせてもらい、言いたいように言わせてもらってきた。神戸大学のリベラリズムを大いに呼吸することができたと思う。ドイツへも二度ゆかせてもらった。すぐれた同僚にも恵まれた。感謝すべき日々であった。

そのリベラリズムが、いわゆる紛争でかなり揺すぶられたことは否めないとおもう。しかし、かえりみれば、その問題は最初から叫ばれていた通り、反安保・反体制をめぐるものであった。大学側の、そして私自身の立場は前者に対しては憲法第九条あり、後者に対しては議会制民主主義ありということであり、学生運動家の主張は、前者は形骸化しており、後者は空洞化しているというにあった。私は、日本の民主化過程を進める意志の存する限り、平和憲法と議会主義とを擁護する方向にのみ未来はあると信ずる。その方向において現在の社会情勢をみ

る場合、教育・医療・都市問類の三点において、社会主義化さるべき時点はすでに不可避のところに来ているように私は思う。しかし、それすらも容易のことでは無論あるまい。党利党略によらぬ、日本の社会主義が大らかに堅実にうちたてられてゆくべきであろう。

私自身の研究と教育とに関しては、気楽にやってきたという他ない。少々詩人肌の好事家タイプから、文学史家風の姿勢におのずとうごいて来たとは思うが、仕事はこれからである。それから、世に教養部無用論を唱える無教養な人間が少なからずいるが、教養は即自己形成であり、広い精神基盤の上に立つ柔軟な人間形成なしに、学問も社会生活もあるものでない。私は職業柄、教室では教養とは一にドイツ語、二に音楽と公言してきた。それは勿論ただのスローガンにすぎない。ドストイェフスキーでもよく、山登りでもよい。要は程度の低い享楽に自己満足することなく、より高きにのぼりゆくことである。私の好きなドイツの詩人ヘルダーリンはうたった。「より高きを讃うるこそわが使命。されば神は、わが心に言葉と感謝を与え給えり。」今後も私は週一、二度、このキャンパスへ来て若い学生諸君と接することができるのを楽しみにしている。

（神戸大学教養部『広報』No.37、昭和四八年四月一日、一八―一九ページ、M・M「随感」）

【第二会場】研究発表

共同研究報告「何故にジャン・パウル作品の邦訳は翻訳者の日本語とジャン・パウルの作品をともに粉砕し、何故にジャン・パウル研究論文は研究者の頭と読者の興味を確実に解体させるか？」（報告者＝故・古着日乾と酢漬竹樹）――本研究についての詳細は、市販の諸訳書および各種紀要・学会誌・研究発表誌類を実見されたし。

【第三会場】本学図書館秘蔵教育関係発禁図書展示大即売会

――展示図書目録――

一、『愚者の呵呵――教官処分粉砕資料集』、一九七一年秋、徳島、山本さんを守る会、B4判三四ページ。
二、『出現罪』、七〇年八月一九日、岡山、荻原勝、B5判一三七ページ。
三、『松下昇表現集』(あんかるわ別号〈深夜版〉2)、一九七一年一月一日、B5判一七二ページ。
四、『〈証言〉'69年――教師の〈大学紛争〉』坂本守信編著、昭和四五年六月一五日、岡山、B5判五二ページ。
五、『ドイツ語の授業』(岡山大学教養部紀要第九号抜刷)一九七三年〔四月〕、荻原勝、A5判三二ページ。
六、『五月三日の会通信』第一号・一九七〇年七月五日―第一四号・一九七三年五月三〇日、五月三日の会、東京、京都、広島、B5判、ページ不定。
七、『資料n「坂本教官」はどこへ行ったか』、発行日西暦一九七三年一月一八日↓西暦n年n月n日、岡山、「坂本教官」の〈教務〉係発行、B5判一一六ページ+nページ。
八、『竹本処分粉砕に向けて・資料集』既刊三冊、以下続刊、一九七三年四月以降、京都、B4判、ページ無数。
九、『愚者の呵呵(続編)』、一九七二年六月一五日、山本さんを守る会、A5変形判一一八ページ。
一〇、『教授の部屋』、昭和四七年二月二五日、山田稔、河出書房新社、四六判二四四ページ。
一一、『自己組織への序――菅谷規矩雄表現集1964-1972』、一九七三年二月三日、東京、B5判一四〇ページ。
一二、『でぃすかばぁ・きせる』第三号、一九七二年八月一日、キセル研究会、はじっこ私論社、B5判四二ページ。

第十一回講義　遊びの教育論

たてつづけにだいぶいろいろなことがありまして、ガタガタといたしておるうちに、非常に重要なことをお話しせずに来てしまったことに気がついたので、きょうはひとつ、それをやることにいたしたい。第一小冊の終り近く、第三破片第三章以下の、「子供の遊び」およびその周辺についてであります。ただし、重要なことは簡潔に、という教育の根本原則にしたがって、我輩の話しも、かんじんなことを指摘するにとどめ、ごくごく手短にすませるつもりである。なにしろ、ジャン・パウル氏も、こう述べておられるくらいですので――《もっとも重要なことについては、私はもっとも手短にすますことができる。なぜなら、それについては時代や図書館が充分くわしく述べてくれるから。》(§139)

さてジャン・パウル氏は、例の「人間ならびに教育の始まりについての脱線」のなかで、子供にとってあたたかみが重要なことを強調し、《人間の雛(ひよこ)にとってあたたかみとは何か――朗かさである。》と確認しておるのであります。彼は悲しげな男のおとならまだしもがまんできるけれど、悲しげな子供にはがまんできない。《陽気さないし朗かさは、その下であらゆるものが、ただ害毒だけを別として、いきおいよく育つところの大空である。》(§45)そして彼は、この朗かさ(Freudigkeit)ないしは陽気さ(Heiterkeit)を、楽しみ(Genuß)と区別して、楽しみのほうはそれがたとえ芸術作品のすばらしい楽しみであっても、人間にひとつの利己的な態度をあたえ、参加(Teilnahme)の姿勢を奪ってしまう、と述べて、楽しむことは動物にもできるが、陽気であること、朗かであることは人間にしかできないのだ、と強調し、後者こそは人徳(Tugend)の土壌であると同時にその花であ

りその花冠である、と言っているのであります。そして、ひとを朗かにさせしあわせにさせ、それを持続させるものは何か、とたずね、それは活動性（Tätigkeit）だけである、と答えるのである。ところが、子供の遊びというのは、これはわれわれおとなの遊びとはちがいまして、《まじめな活動の表現以外のなにものでもない。》（§48）のです。教養の大切さとともに遊びの重要さについても指摘する詩人肌の好事家や文学史家風の識者は、決して少なくないのでありますが、ジャン・パウル氏の場合は、これが、たんなる教養主義や進歩的保守主義や体制順応的社会主義などとは何の関係もなく、むしろ自由、主体性、表現活動、関連性の意識化、等々の重要な理念と密接にかかわって重視されているということ、これはいずれ機会があればまたあとで詳しく述べることにいたしまして、ここではさしあたり、子供の「おもちゃ」についての彼の見解を、彼自身の口から語ってもらうことにしたいと思うわけであります。さて、幼い子供のための、安価で、長もちし、男女両性に適した純粋なおもちゃは何か？——と彼は問います。そしてこう答えるのであります、《だれもが松果腺のなかに（若干のものは膀胱のなかに）持っていて、鳥たちは胃袋のなかに持っているもの——砂である。》（§53）

遊びと関連して、子供にたいする命令や禁止、さらには罰などについても、ジャン・パウル氏は、いろいろおもしろいことを語っている。くわしく紹介していると、『レヴァーナ』そのものよりも長い本を書くことになってしまうので、要点だけ申しますと、ここでもまた徹頭徹尾、子供の自由な決断による主体的な行為を育てることに主眼がおかれていることがわかります。《命令したり禁止したりすることに喜びをもってはならない。むしろ、子供の自由行動に喜びをもつべきだ。あまりしばしば命令することは、子供の利益よりはむしろ両親の利益を念頭においているのである。》（§64）　あるいはまた、《行為によってよりは言葉によって禁止せよ。子供か

自己が世に處する終生の手段として、苦慮選擇せし學科を研修すべく、進んで入學せる學校より、中途にて追放さるゝは、學生としての最大不利にして、其汚名と共に、前途の方向に躊躇する場合多し、これが若し怠惰放蕩に起因するならば、自業自得の墮落徑路とすべきも、血気にはやる一時の感情に激せし暴行などにてありし時は、可惜青年の進路を誤らしむる事尠からざるべし

去日、東京帝大法學部教授穂積重遠先生に對して、予は、「退校處分を私刑と見るのは如何でせう」と質問せり、先生チョット首を傾けて「サア、官立學校では校則に據る行政處分として居るのですが、私立學校の退校處分は私刑と見てもよいでせう」と答へられたり

其後、予熟ら考ふるに、法學上の議論は兎も角、官立學校にては行政處分と云ふとも、學生の方にては、其結果大なる苦痛と損害を受る事なれば、之を刑罰と見るも可なるべし、例せば、内務省が行政處分として、圖書の發賣を禁止せし場合、發行者にとりては、刑事問題としての罰金四五百圓よりも、其苦痛と損害の大なること多ければなり

（「退校處分は最大私刑」、宮武外骨『私刑類纂』、大正十年十月二十日発行、昭和十一年八月十日五版、成光館出版、一〇六ページ。）

らナイフをもぎとるのではなく、言葉にしたがって子供が自分でそれを手ばなすようにさせよ。第一の場合は、子供は他人の力の圧迫にしたがうのであり、第二の場合は、自分自身の心の動きにしたがうのである。》（同）

――ある意味ではごくあたりまえの指摘であるが、こうした原則がすべて（たてまえとしてさえも）かなぐりすてられているのがわれわれの状況であることを考えるなら、もう一度この意見に耳をかたむけ、「教育とは何なのか？」ということを自分なりに考えてみるのもよいのではないか、と我輩もこのごろは考えるのであります。命令したり禁止したりする人間はだれもが、とりわけそれが自称他称の教育者である場合には例外なく、子供なり学生なり国民なり従業員なりのタメを思って言っているのだ、それどころか、現象の内奥を見て、改革の方向を見とおして、大らかで堅実な社会主義的未来のためにやっているのだ、とおもてむきにも主張し、ある場合には心そこからそう信じこんでもいる。そして、言うことをきかなければ、「誠意をつくして説得に努めたがききいれられなかった。まことに遺憾であるが……」てなことを言って、教材⑥にも述べられているような処分をする。はじめはその処分は両親なり教育者なり直接の管理者なりが自発的に自分の力の範囲内でおこなう、つまり私刑であるわけですが、やがて子供がもっと大きくなって両親の手にあまるほどの主体性と肉体的な力とをもつようになったり、反抗者の言い分と数量が重みをますようになるにつれて、その筋の専門家に処置を依頼することになります。あげくのはてには、いつも協力してくださる専門家筋にはこちらも協力してさしあげるのが当然、ということになって、官民一丸、挙国一致、夫婦相和し、兄弟に友に、父母に孝に国に忠に、一億挙げて権力者およびその走狗のお手伝いにいそしみ、みずから一匹の犬となって、毛色のかわった隣人を監視し、カゲグチを言い、ツゲグチにはげみ、なにごともオカミの顔色をうかがって判断し行動するようになる。かくして、「この顔

教　材　⑦　イヌは至るところでプライバシーを監視する

にピンときたら一一〇番！」とか「一一〇番！　あなたの隣にいませんか」とか「くよくよするより　まず一一〇番！」とか「何はなくとも一一〇番！」とか「泳がすな、ゆるすな、ぶっ殺せ！」とかいうスローガンとポスターが、国民教育に絶大な貢献をする結果となるのであります。では、きょうはここまで。

第十二回　言葉について——その一

前回は「遊び」についてお話ししたわけですが、ジャン・パウル氏は§56で、《もっともすばらしくもっとも豊かな遊びは、話すことである》と述べております。そこできょうから数回にわたって、第三小冊第七破片第二章以下で詳述されている「言葉」の問題、およびそれと関連したいくつかのテーマについて勉強していくことにいたしたい。

ジャン・パウル氏が言葉というものをどのように考え、どのように駆使したかについては、実際に同氏の諸作品（定本全著作集＝全三部、三十三巻、総計一六、四六二ページ、ヴァイマルおよびベルリン、一九二七年—六三年）をすみからすみまでくりかえし精読すればおのずと明らかになる仕組みになっておるのでありますが、残念ながら我輩にも諸君にもそれだけのヒマがないので、ここで簡単に解説しておくこともあながち無駄ではありますまい。まず第一に指摘しておかなければならぬのは、ジャン・パウル氏は決して言葉というものをあまりにも狭くとらえるようなことをしていない、という点であります。明確に意味の理解された言葉でなければ教育上

よろしくない、とか、言葉というからには口から発せられ耳から受けとられるものだけが言葉である、とか、そういうむずかしい限定をつけたりしない。《母国語は、子供たちのためのもっとも無垢な哲学であり、思慮深さの演習である》(§131)わけですが、そのさい、子供にむかってしゃべるのにわかりにくさを恐れてはならない、というのです。いくつかの単語がわからないことを気づかう必要などないどころか、文全体がわからないことも恐れるな、というのです。なぜなら、《諸君の顔つきやアクセントや、理解しようという予感的衝動が、半分は解明してくれる。そしてこの半分と時間とによって、あとの半分が解明される》(同)からであります。《時間と関連という暗号解読所を信頼せよ》と彼は強調するのです。

この考えかたは、我輩がこれまでくりかえしくだくだしく申し述べてきたごとき、ジャン・パウル氏の「教育」観の基本思想と直接つながっていると言わねばなりません。つまり、ジャン・パウル氏は、一貫して、被教育者自身の主体的な作業を重視し、これをできるかぎり自由に活動させてやる努力がすなわち教育であると考える。そしてそのさい、この自由な主体的作業の養分でもあり潤滑油でもありまた結実でもあるのは、事物の関連性、過程性であります。世界の諸現象、諸事象を、完結し固定した個別的事実として教えこむのではなく、その可変性、発展性、関連性を、相互の対照において推測し、構成的にみずから把握していく、あるいは発見していくように、しなければならないのです。したがって、言葉とは、完成した内面を表出するためのものではなく、外界の観察によって内面そのものを展開させ形成していくためのものでもなければならないわけです。《フィヒテは『ドイツ国民に告ぐ』のなかで、外的な観察ないし対象の挙示と配列にあまりにもわずかしか価値をおかず、もっぱら内的なもののためにのみ(感性のためにのみ)それを要求している。なぜなら、彼の見解では、外的なものの挙

示は子供にとってただ伝達という働きしかせず、よりよい理解のためには役立たないからである。しかし私が思うには、もしも雑然とした光を言葉によって星座のかたちに分類し、これらによって全宇宙を意識によってとらえうる諸部分に分解しないとすれば、人間は（外の世界の言葉をもたぬ動物や暗い音のない大海のなかを泳ぐ動物と同じように）これまた外的な観察の無数の星の大空のなかに無感覚に自己を失ってしまうことだろう。ただ言葉だけが、この広大な一色の世界地図に彩色をほどこすのである。》（§131）

このように、ジャン・パウル氏は外的世界と内的世界を切りはなすことなくとらえようとし、その両者を結ぶものとして言葉を考えましたから、なんとも卑小で絶望的なドイツの現実にいくら愛想をつかしても、この現実からさっさと顔をそむけてもっぱら言語芸術的営為によって豊かで測りしれない自己の内面を探究する、という道には決して踏みこまなかったのであります。故ルカーチ教授がまだ若くて目がよかったころ、『小説の理論』のなかで歴史的時代区分を転倒させながらも鋭く指摘し、『魂と形式』で情熱的に描き出してみせたように、この時代にあって内面への道の誘惑はきわめて大きかったにもかかわらず。そして、ジャン・パウル氏がとったこれとは逆の進路のおかげで、たしかに一方では、彼の文学作品のなかで当然のことながら外的世界と内面との葛藤・分裂はついに統一されることなく、何度も言うように彼の多くの作品は未完のままに終るという、さんたんたる結果にならざるをえませんでした。しかし他方では、同時代のロマン派の作家たちの多くや二十世紀のファシズムのもとでのドイツ・日本その他の作家・評論家たちの少なからぬ部分を再三とらえるあの独断的・居直り的・亜ファシスト的・主観的貴族主義的内面指向におちいることなく、きわめてグロテスクできわめて畸型的できわめて醜めきった数多くの独創的形象をとおして、この現実とそのなかでの人間の内面とをひとまとめにしな

がらメタメタに掘りくりかえしつづけることになるのであります。

また脱線しましたが、本論へもどりましょう。関連性と過程性ということについて、お話ししていたのでした。母国語についてだけでなく外国語の学習についても、ジャン・パウル氏はこの原則を強調します。我輩もつねづね言っておるのだが（といっても、このクラスではまだ一度も言っていなかったけれど）外国語を学ぶさいにもっとも重要なことは、文法規則を丸暗記したり、いわんや単語を棒暗記したりすることではない。こんなことは至極当然のことなのであるが、さらに蛇足的にひとこと進めて言うならば、そのさいもっとも重要なことは、ヤマカンを養うことなのである。ジャン・パウル氏は、いろいろな教育力のうちでも、非常に母国語と異なった外国語（ドイツ語にとってのイタリア語のごとき）がもつ教育力を先人たちとともに高く評価して、こう述べております、《たしかに、外国語の単語の辞書はたいして教育の役に立たない。これとの対比で自国語の単語のニュアンスがいっそうはっきりしてくるという点を除けば。しかし、文法――舌の論理としての、反省の最初の哲学としての――は、決定的に重要だ。なにしろ、文法は事柄そのものの記号をふたたび事柄へと高め、自分自身に向きなおりつつ自分自身の観察活動を観察すること、すなわち反省することを、精神に強いるのだから。少なくとも、（言葉の）記号をいっそう確実につかみ、それを例えば絶糾のように感性そのもののなかへ溶けこませてしまわないことを、強いるのだから。》（§131）

主体の自主的な主体形成は、当然のことながら、このような反省、ないしは自己意識化↔世界の意識化という作業と結びついておこなわれます。ジャン・パウル氏は、こうした考えを展開してみせるにさいして、もちろん彼なりの根拠をあげ、「形成本能」（Bildungstrieb）なるものをその根拠とするわけですが、我輩自身は、まだ

自分でこの形成本能という存在を直接目にしたことがないので、本当にそんなものが人間のなかにあるのかどうか、保証するわけにはいかない。しかし、たとえば、《一枚分だけ書くことは、一冊の本を読む以上に生きいきと形成本能をかきたてる》（§132）というようなくだりを読めば、なんとなくわかるような気がしないでもありません。言葉の学習にさいして、文章を書くということがどれほど有意義であるかは、だれしも経験から知っているはずであって、この原則をさらに深めていくならば、我輩がこのクラスでやったように試験の問題やレポートの課題をこちらから与えるのではなく、学習者自身が自分で問題をつくるべきであり、さらにはその結果をも自分で評価評定すべきなのであります。そういう試みをおこなうことなく、あるいは少なくともそういうことを構想することもなく、まるですべてが個別的に完結し完成していて、不動の価値として学習者を見下しているかのような原理にしたがって教育なるものがおこなわれることを、ジャン・パウル氏は苦々しい気持で見ていたのでした。《いったいなぜわれわれは、これほどわずかしか発明家をもっていないのか？　そしてそのかわりに、こんなたくさんの学者をもっているのか？　彼らの頭のなかには、ただ不動産ばかりがぎっしりつまっていて、そのなかではどの科学の概念でもまるで党派よろしくたがいに排他的に隠者の庵に住むようにして住んでおり、その結果、その男がなにかひとつの科学について書くときには、それ以外の別の科学のなかで自分が何を知っているかなどということを、なにひとつ考えてもみないのだ。——なぜこうなるのか？　それはひとえに、子供たちに理念のとりあつかいかたよりも理念そのものをたくさん教えるからにほかならず、学校での彼らの思考が彼らのおしりと同じように不動の状態に固定させられていなければならないからにほかならない。》（§136）だが一方——《どんな発明も、最初はほんのひとつの思いつきである。ぴょんと飛びだしてきたこの一点（pointe）から、

歩みをつづけるひとつの生きた姿が発展していく。形成本能は交合し、三倍になる。ひとつの機知ある理念が、ちょうどあの生まれたばかりのディアーナのように、母親が双児の弟アポロを分挽する手助けをする。》（§137）

さて、とうとう、待望の「機知」という概念が登場いたしました。さよう、Witz であります。ウィットと言ってもよいのでありますが、とりあえず機知とでも訳しておくことにいたします。なお、これについてはぜひとも『美学入門』第二部第九プログラム、第四十二章以下で論じられている「機知について」という考察をご参照いただきたい。さいわい翻訳も出ておりますので、訳文理解のために必ず原書をかたわらにおいて対照しながら、ご一読のうえ、我輩の講義に耳をかたむけてください。

『レヴァーナ』の著者は、かつて、いなかの学校で三年ばかりのあいだ、年令も性もさまざまな十人ばかりの子供を教えたことがありました。そのとき、彼は、一冊のノートを用意して、『わが生徒たちの洒落アンソロジー』（Bonmot-Anthologie meiner Eleven）と題し、これに教え子たちが口にした洒落を書きこんでいったのであります。ちょっとした自由な思いつきを重視したのは、言うまでもなく、さきに引用しておいたような考えに支えられてのことでありましょう。このかつての試みを紹介しながら、ジャン・パウル氏は、つぎのように述べるのであります――《奴隷状態は、機知のあらゆる塩泉を濁らせ、これを埋めてしまう。だから、ちょうど弱小君主のようにもっぱら検閲と言論出版弾圧によって王座と講座を維持している教育者は、子供たちを自由にし機知あるものとしてやるために、いっそ散歩でも選んだほうがよいのではあるまいか。例の洒落アンソロジーの作者は、生徒たちにたいして、あまつさえ（しぶしぶながらも）彼自身をやっつけるような思いつきすら許可したのであった。》（§138）言葉を学ぶ（習う）ときにすら、ジャン・パウル氏にとっては、子供の能動性の発揮が

重要なのであり、たんなる知識や理念でなくそのとりあつかいかた、その関連性の発見が、問題なのであります。

この彼の考えかたがもっとも集約的にあらわれているのは、おそらく、第七破片第六章の「記憶ではなく回想の育成について」(Über die Ausbildung der Erinnerung, nicht des Gedächtnisses) においてでありましょう。ここにおいてジャン・パウル氏は、個々の事象を固定的にとらえる思考方法に反対し、諸事象の関連をみずから意識化する作業の重要性に加担して、自己の教育観を全面展開しております。記憶ではなく回想を、と彼が言うとき、その記憶とは、すでにできあがった個別的・固定的な事実の受容とかかわるものにほかならない。つまり、記憶とは、本質的に静的で受動的な営みである。それにたいして、回想は、さまざまな事実を結合し、再構成し、関連性と過程性において過去と現在の現実をとらえます。あるいは、それを発見し形成すると言ったほうがよいかもしれない。つまり回想は、能動的・主体的な営み、真の意味での内面化なのであります。教育の実践とのかかわりで『レヴァーナ』が主張していることを、ひとつだけ例示しておきましょう――《回想の結合力を訓練するために、諸君のぼうやがごく小さいころから、いろいろな出来事の話し、たとえば子供自身の一日の出来事の話しとか、他人の話しとか、なにかある童話とかを、反復させなさい。つまり、かなり早い時期には、その錯綜したからみあいのゆえに、きわめて複雑な話しがいちばんよいのだ。さらに、もしも彼をなにかの外国語の面でも、そしてそれと同時に回想の面でも、ほんとうに早く成長させたいと思うなら、単語ではなくてすでに何度か通読した外国語の一章を暗記させなさい。回想は記憶を補佐する。単語は単語の組みあわせによって注意をはらわれるようになる。そして最良の辞書とは、お気に入りの本である。》(§142)(傍点は我輩による。)

「機知とは遠い類似点を発見する力である」という定義にたいしてジャン・パウル氏は、遠くない類似点や類

似していない遠いものをも機知の活動範囲に組みこみ、この概念に、遠近や類似の有無にかかわらず関連を発明する力という特性を付与している。これは『美学入門』のなかでのことですが、この美学的探究のなかにある精神が『レヴァーナ』のなかでも息づいているのを、われわれは見ることができるのであります。《関連は回想に魂をふきこむ》(§142)という言葉は、過去の出来事を個別的な完結した事実として受けとることを拒否し、見えない関連を発見し発明する作業のなかに現実の把握とさらには時代精神の超克を志向しようとしたジャン・パウル氏の、文学原理=教育原理を、簡潔に表現しているのです。回想は、風化していく記憶とは逆に、過去を現在と関連させ、過去をも現在をも既定のものとは別の姿で再構成します。この真の意味における総括の作業は、現実の悲惨さとその激動のゆえに、あるいは歪んだグロテスクな姿をとった現実をしか、われわれのまえに提示しないかもしれない。ちょうど、ジャン・パウル氏のすべての作品がそうであるように。だがしかし、これをすらもなお意識化と機知の働きにゆだねることによって、われわれの回想は、未来にむかって想起する作業への道を、少なくとも模索しはじめるのではありますまいか。そのとき、いわゆる〈教育者〉は、その特殊的存在を失い、みずからもまたこの共同の回想作業のなかに参加していかざるをえないことを、悟らねばならないでしょう。

ハイ、みなさん、いかがでした？　ジャン・ギャバンの『レヴァーナ』、はじめて見ましたネ。ながいこと、幻の名作といわれていて、だぁれもその実物を見たシトがなかったのですヨ。レヴァーナって、女の神さまなんですって。顔が大写しになって出てこなかったのが、とっても残念ですネ。でも、そのかわり、あのジャン・パウル、何度も何度も出てきました。出てきては、サアもうつぎからつぎから長い長いセリフをしゃべりました。まあ、あの、口ぶりのみごとだったこと。内容の気がきいていたこと。ああいうみごとな長ゼリフがたびたび出

てくるフいルムは、もうこのごろではほとんど見られなくなりました。見られなくなったといえば、そう、『レヴァーナ』みたいな作品も、『レヴァーナ入門』みたいな雑文も、どちらもあまり見られなくなりましタ。さびしいですネ、悲しいですネ。でも、そのほうが人類の進歩のためには良いのかもしれませんネ。なぜでしょう？みなさん、おわかりですね。そう、なにしろジャン・パウルが活躍した時代といえば、あの西部劇とくらべてさえ半世紀以上も大昔の、それはそれは野バンな時代でしタ。だからこそ、あんなにさかんに教育論がたたかわされたのですネ。ペスタロッチ、バーゼド、ヘルバルト、シュヴァルツといった名スターたちが、競いあっていました。みんな『レヴァーナー』に登場するんですヨ。この映画の原作は、チッチャな子供のことを描いています。でも、子供のことだからといってバカにしてはいけませんネ。それはそれは大きな、人間のことが、じつは語られているのですヨ。ただ、とっても残念なことに、カメラがそれをうまくとらえきっていなかったのですネ。何ともハラの立つ、バカバカしいところ、わざとらしい技巧が目につくイヤミなところが、タクサン出てきましタ。ドタバタ喜劇のつもりでも、笑うのは作者だけなんです。背筋がゾオーッとさむくなりましたネ。でも、みごとなセリフもありましタ。「機知とは遠い類似点を発見する力である」ですって。ジャン・パウルはこれを否定してしまうのですけれど、いいセリフですネ。ロマンチックですネ。遠い夢ですネ。遠くまで行くんだ、ですネ。われわれも、ジャン・パウルといっしょに遠くまできたのですネ。長かったですネ。つらかったですネ。途中でいねむりをしました。ハラが立ちました。それから拾い読みをしました。つぎに飛ばし読みをしました。しびれがきれました。白毛もふえました。一ページ、十ページ、百ページ、じっとガマンの子であった。さあそれからどうでしょう、映倫とケーサツは、このフいルムの作者を厳重に処罰すべきだと、国に意見書を出すと言ってい

るのですヨ。はやくストライキがおこって、封鎖になって、こんなものが粉砕されてしまうといいですネ。そのときは、またいっしょにこれが粉砕されるのを見ることにいたしましょう。

ハイ、来週の予告篇です。『レヴァーナ峠で首がとんだ』、ごぞんじ紛争シリーズの収拾篇。紛争仕掛人の一部暴力学生集団とスケバン過激派、これに挑戦するお庭番・民主化グループの奮闘を描いた一ッ千九百七十年代初期の名作です。日活ポルノの老け役で好演している大学教授が、少々時代遅れの打倒市をやっつける、ムネのすくようなシーンの連続です。

ハイ、それではみなさん、バリケードのなかでまたお会いしましょうネ、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。

第十三回〜第二十五回講義　ストライキ

長期スト（二〇〇一年まで）断固貫徹／

二〇〇一年元旦には犬吠崎灯台の下に結集し、ともに日の出を見て、蝶を捕えよう／

スト実・星を見ない会
釜ケ崎野蝶の会・全共闘

スト反対／民主化貫徹／

全大学人の皆さん／　ひとにぎりの暴力学生とそれに追随する一部教職員にだまされることなく、ストを解除して、一にドイツ語二に音楽、教養ある学園生活のために筑波新構想大学の完成まで、ともにがんばりましょう／

不当なストライキを許さないぞ／

大学当局は自主解決のために不平分子の告訴・告発をおこなえ／

秩序ある教育の場を推しすすめる会
三悪（スト・造反・乗っとり）追放運動本部
大学を明るくする会

教材⑧

掲示第三号　　本学一般

昨二十一日、他大学の学生が本学内に立ち入ろうとした事態に関連して、本学のみなさんは、左記のとおり御了知ください。

記

一、学生諸君は常時登校して、事態の解決に努力してください。

一、正門その他各門を補強し、バリケードで強化したのは大学の方針であります。

一、ヘルメットは、できるだけ調達しましたが、緊急のことで種類が雑多であり、また数も少なく、大変御迷惑をかけましたことは遺憾であります。

昭和四十四年一月二十二日

京都大学

教材⑨

掲示第二号

現在学内では、多くの施設で封鎖・占拠が行なわれている。これに対して従来それぞれの部局長から、解除・退去が発せられてきたにもかかわらず、なおこのような不法な行為があとを絶っていない。

入試を含む大学の業務の正常な遂行に多大の支障をきたすこのような行為は、もはやこれ以上看過し難い。すみやかに封鎖・占拠を解き、今後かかる行為を行なわないよう改めて厳重に警告する。

昭和四十八年二月二十六日

京都大学総長　前田敏男

教材⑩　ストライキ実行委員会主催「反大学」入学試験問題

次の文を音読し、かつ和訳せよ（三〇分）

官吏侮辱犯の無罪

迂生ハ去月二十一日ノ夜本府警部補徳田正七郎氏ヲ馬鹿ナリト侮辱シタリトテ同氏ノ拘引スル所トナリ爾來下京警察署ノ監倉ニ留メ置ル、コト四晝夜ノ後六角監獄支署ニ拘留セラレシモ幸ニ法官ノ明察ニ由テ其果シテ侮辱セザリシ事ヲ認定セラレ遂ニ本月六日ヲ以テ無罪ノ宣告ヲ蒙リ再ヒ自由ノ身トナルヲ得タリ仍テ此段辱知ノ諸君ニ報道シ併セテ其冤罪ナリシ事ヲ世上ニ証明ス

京都下京區第九組妙滿寺町

明治十六年七月九日　伊藤謙造

（明治十六年七月十日『京都滋賀新報』第六百三十七號所載）

審　査　説　明　書

（氏名） 特に名を秘す	（所属） 狂徒大学雑用学部
（官職） 文部教官・助教論	（職務の等級） 教育職㈠8等級
（処分の種類および程度） 懲戒免職	（根拠法令） 私国家公務員法第82条第1号，第2号および第3号

（審査の理由）

上記の者（以下「同人」という）は，唱和44年1月から退化1年3月までの間に次のような行為をした。

(1) 同人は，暴力学生を排除するために本学が構築した逆バリケードの防衛に非協力的であった。

(2) 同人は，暴力学生が構築した不法なバリケードを見て，「これで大学らしくなった」という教育者にあるまじき不用意な言辞をもらした。また，それを同僚教員に聴かれた。

(3) 同人は，試験を行なうと称し，学生に答案用紙を配布したのち，厳正なる監督の義務を放棄して生協食堂へ昼食を食いに行った。

(4) 平和憲法のもとでの発禁図書たるジャン・パウル著『レヴァーナ』を教材として，公序良俗に反する講義を長期にわたって行なった。

(5) 前記『レヴァーナ』に関する破廉恥きわまりない論文を紀要に発表し，国費を浪費するとともに，本学研究者の名誉をいちじるしく傷つけた。

(6) 前項の行為によって，神聖なる研究発表誌にかかる公序良俗をはなはだしく害する「論文」が掲りうるという前例をひらき，今後の治安をおびやかした。

(7) 同人は，同人に対する処分発議にみずから反対した。

上記の諸行為は，いずれも私国家公務員法の諸規定に違反し，教育公務員としてふさわしくない行為といわざるをえない。

これらの行為を総合して判断すると，その違法性は，極めて顕著であり，同人は，私国家公務員法第82条第1号，第2号および第3号の規定により，懲戒処分として免職することが相当であると認める。

狂徒大学評議会は，上記のとおり，学長から申し出があったので，教育公務員特例法第9条第1項の規定により審査することに決定した。よって，この審査説明書を交付する。

狂徒大学評議会㊞

（決定日付） 唱和49年2月30日	（交付日付） 退化1年3月1日

（教示）教育公務員特例法第9条第2項の規定により，この審査説明書を受領した後14日以内に狂徒大学評議会に対して請求した場合は，口頭または書面で陳述する機会が与えられます。